

---

# 俺こそが名脇役！

ふっしー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺こそが名脇役！

### 【Nコード】

N7768Y

### 【作者名】

ふっしー

### 【あらすじ】

恋愛に憧れる高校生、里美公太はなんと今年に入っですでに告白四連敗中。それも決まって「あなたは違う」と言われてしまう。告白失敗に呆然とする公太の前に突如現れた黒い巫女服の美少女。彼女の名前は朱夏。縁結びの神を奉る巫女だという。朱夏が語りだした公太の告白失敗の理由。それはなんと公太の主人公時間が無くなったことが原因だった。主人公時間とは、文字通り人生の間で人が主人公になっていられる時間。人生の主人公から降ろされた公太は二度と恋愛が出来ない体になってしまっていたのだ。だが、主人公

に戻る方法が一つだけ存在すると朱夏は語る。その方法とは『他者の物語に脇役として登場する』こと。脇役が他の主人公にとって、重要な存在となり人気者になれば、スピノフとして主人公に返り咲けることがあるというのだ。この話を聞いた公太は、巫女の朱夏、親友の優と共に、主人公に戻るために脇役として他の主人公の恋愛のサポートを行うことになった！ 脇役視点で物語を描くドタバタ学園ラブコメディー！

## ブローグ

「俺と　付き合ってください……！」

……ふふふ……、完璧だ……！！

金曜日の放課後。

一週間の中で最も気の緩むこの時間帯に、俺こと里美公太<sup>さとみこうた</sup>は人生の中で最も緊張していた。

静まり返った屋上で、思春期の男女が二人きりで向かい合っている。

聞こえるのは、風の音と微かな生徒の声と、そして俺の心臓の鼓動。

神々しくも切なく輝く夕日をバックに、俺は目の前の彼女に告白した。

了承を得るために差し出した右手。

角度、スピード、タイミング。まるで計算し尽くしたかの如くしなやかな動き！

それに加えて俺の表情。

恐怖、期待、緊張、その全てに堪え、必死に真剣な顔を作り出す。俺は本気だとの意思表示を視線で行う！

さぞかし爽やかで、誠実な印象を与えられたことだろう！

彼女の表情はどうだ！？　見てみる！　頬が赤らんでいるではないか！

これも俺が今まで実行してきた作戦の賜物だと言えよう！　それはもう苦労したんだ！

出会いからこの告白まで、俺は様々な手を尽くした！

彼女の情報を得て、周囲の人間関係に根を回し！　同情を誘い味方を作った！

彼女の両親から姉妹、親友に至るまで！　クラスの皆からも応援

された！

屋上に彼女を誘ったとき、クラス中から黄色い悲鳴が飛び交った！  
その時の彼女は、恥ずかしそうにしながらも、期待するような視線をこちらに送ってきたほどだ！

俺、そしてクラスの誰もが、新たなカップルの誕生を確信していた！

そしてこの告白！ これで断る女子なんているはずもない！！  
恥らう彼女。いやあ、焦らしてくれるぜ！  
しばらくすると、彼女はおずおずと口を開いた。

彼女の第一声。それは栄光の告白了承に違いないのだ！

さあ、答えてくれ！！

「ごめんなさい。      あなたじゃないの」

うんうん。 そうだろう、 そうだろう。 こんな雰囲気の中、断る女子なんて

「え……！？」

落ち着け、俺。 何かの聞き間違いだ。 そうだ、 そうに違いない。

「ご、ごめん！ よく聞こえなかった！ もう一度お願い！！」

…… 今度こそ、 しっかりと聞くぞ！！ さあ、 もう一度……！！

「ごめんなさい。 あなたは違うから……」

ふふん。 そうね。 やっぱり聞き間違いじゃなかった…… って。

「ええ！？ えええー……！！？ ど、どうして！？」

「ごめんなさい……。 さよなら」

俺の言葉を完璧に無視し、彼女は俺に目もくれず屋上から走り去って行った。

後にはポツンと俺一人。

「…… 何故だ！？ こんな馬鹿なことが……！？」

まさかの告白拒否。 完全に想定外だ……。

「あ、ありえないぞ！？ 一体何が起こったというんだ！？」

告白する前の彼女は誰が見たってOKだった。それなのに一体どうして!?

「俺、何か間違っていたのか!? 知らないうちに彼女の嫌がるようなことを……?」

いや、それはないはずだ! 彼女の性格、思想、趣向、人間関係や家族構成に至るまで徹底的に研究し、彼女の目を惹き、好みそうな行動をしていたんだ。

地雷を踏むようなことは決してなかったはず!

「なのに、どうしてこうなった……」

……あれ?

俺はしばらく考えて、一つ気になることを思い出していた。確か以前にもこんなことがあったような……。

あれは確か……前回の告白のときも……。

#### 数ヶ月前

「俺と付き合ってください!!」

「ごめん、あんたじゃないから」

「なんですとー!ー!ー!」

……ってことがあったような……。

「デジャヴ、なのか……?」

そういえば最近によく女の子に振られる。

昔の俺は、言っては何だがモテモテだったんだ。

常に彼女はいたし、別れてもすぐに違う彼女が出来たってもんだ。そんな俺が、今はこの有様だ。告白しても実らない。盛者必衰ってか? やかましい!

今年に入って、なんと4連敗中。しかも全部決まって

『あなたじゃないの』

と言われて断られている。流行っているのか……?

「あー、また振られたか……」

ともあれ振られてしまったものは仕方ないよね。

「まあいいや！ 次の恋を探そう！」

と口にして決意を固めた。その時だった。

「あなたには、もう無理よ。」

俺しかないはずの屋上に、どこからともなく凜とした声が響き渡った。

「だ、誰だ！？」

驚いた俺は声のした方へと振り向く。屋上の給水タンクの上にその姿はあった。

「あ、あんた誰だ！？ 一体そこで何してるんだ……！！？ ……つて、委員長！？」

どんな展開！？ なんで委員長があんなところに！？

俺は驚愕を隠しきれなかった。その見覚えのある彼女の名は縁朱<sup>えにしし</sup>夏<sup>ゆか</sup>。

我がクラスの委員長で、活発な性格と、美麗な外見で、クラスどころか学校中から人気を集めているアイドルなのだ。

だが、その彼女が何故か巫女さんスタイルでそこに立っていたのだ……！！

それだけではない！ 特筆すべきはその巫女服！

真っ黒な巫女服だって！？ そんな巫女服、見たことないぞ！？

「なんで巫女さん！？ しかも黒だと！？ …………… いや、今それはどうでもいい！！？」

どうでもいいわけないけどね。実はすげー気になってる。

「委員長、今のセリフ、一体どういうことだ！」

「その答えは ……とうっ！！」

「……飛んだだとうっ！！」

委員長は得意げに給水タンクの上からジャンプした！

「あ、危ないって……！！」

と、俺は注意したものの、黒巫女服をはためかせ空を踊る姿はとても美しく、つい見とれてしまっていた。……のだが

「ぎゃうー!」

予想通りというべきか、着地失敗。

「あちゃー……。あれは痛い……」

委員長はしばらく悶絶していたが、俺の視線に気づき、さっと立ち上がりこちらに向き直った。

「やり直しよ!」

「……何を……?」

「あなたには、もう無理よ」

おお、今こけたことを完璧になかったことにしている!! なんてスルースキルだ!

……って言ってる場合じゃないよね。

「なあ、委員長。それってどういうことだ?」

「あなたには、もう無理なのよ」 (チラッ)

「……」

……マジで最初からやるのかよ……。

「……」

「……………」 (ウルッ)

いや、そんな涙目にならなくても……。どれだけ恥ずかしかったんだよ……。

仕方ない、少しだけ付き合ってやるか……。

「なんで巫女さん!? しかも黒だと!? ……いや、今それはど

うでもいい! 委員長、今のセリフ、一体どういうことだ!」

……でセリフ合ってたよね?

「どうもこうも、あなたはもう二度と恋愛することが出来ないってそう言ってるのよ」

あっけらかんと言いつつ巫女さん。いや、委員長。セリフは合ってたみたい。

バックには夕日。正直、絵になるよなあ。……着地に成功してい



ればもつと凄かったのだろうけどね。

……いや、違うだろ俺！

今、とんでもない事を言われたぞ！？ 俺はもう二度と恋愛が出来ないって！？

「あなたはもう一生恋愛することが出来ない」

「一生って……。もしかして死ぬまで？」

「そ。死ぬまで」

言い切られた！？ 納得いかんぞ！？

「なんでだよ！ どうしてお前にそんなことが分かるんだ！？」

「見えるのよ。私には」

薄っすらと笑みを浮かべる巫女さん。目には涙が浮かんでるけど。やっぱり痛かったんだなあ……。

でも全力で耐えている。こけて打った場所をちよいちよい気にする姿が実に可愛い。

黒巫女服も間近で見ると迫力あるね。うん。とても似合ってる。

しかも良いにおいがするし！

ショートヘアも意外と巫女服とマッチしてるし。

薄っすらと膨らむ胸も ……うん。こっちはまあまあかな……  
察しよう。

思わず顔を緩めてしまう俺。しょうがないよ。だって可愛いんだもん。

……って俺はこんなときに何考えてるんだ！ 今はそれどころじゃないだろ！？

でも可愛いデヘヘ。

「ってこと」

「……フ……フオオオオオ……」（葛藤中）

「ねえ、ちゃんと聞いているの？」

「もちろんさ！」

嘘です。半分くらい聞いてませんでした。

「そう。じゃあ話を続けるわね。それで私には人の“主人公時間”

をすることが出来る能力があるの」

へー、見ることが出来るんだ！。すごいねー。

「……………って主人公時間って何よ！？」

「主人公時間っていうのは、文字通り人生の間で主人公になっていられる時間のこと。主人公時間は誰もが持つていて、その間とはとにかく異性にモテるの。でもあなたはその主人公時間を」

な、なんとなく次のセリフが分かるぞ。もの凄く嫌な予感。

「全部使い切ってしまったの」

「なんだって……………！？」

予想通りすぎるー！！　今までモテモテだったのはそういう理由だったのか！？

……………って、おいおい待て待て落ち着け俺。まだ慌てる様な時間じゃない。

いくら可愛いとはいえ、このこの巫女さんの言うことを信じるってのか？　そんなオカルト無理があるぞ？

「……………なあ、その主人公時間って、本当にあるのか？」

「あるわよ。現実にあなた、たった今振られていたじゃない」

「なぬ！？　お主、見ていたと申すか！？」

「ええ、惜しかったわね。主人公時間中だったら、間違いなくお似合いのカップルになっていたでしょうに」

チクショーっ！　やっぱりそうだったのか！　お似合いのカップルだったなんて……………。なんてこったい！

「ちなみに、過去3回全部見てたわ」

「なんだって……………！！」（二回目）

なんかストーリーカーマがいだな！　でも可愛いから許しちゃう不思議！！

……………二度目の絶叫。さつきから叫んでばかりだな俺！　喉痛い……………。

「それに全てこう言われてたでしょ？　『あなたは違う』ってね」「何故それを！？」

凶星だった。過去全て例外なくそう言われていたのだ。

「これはね。あなたは主人公とは違うって、そういう意味なのよ？ ヒロインはいつだって主人公と恋実るものでしょ？」

そうか。だから今まで同じセリフで振られたわけね！ なるほど、納得！！

「……………するわけがなからう！！ すると俺はもう一生恋愛が出来ないうてのか！？」

「……………なあ、どうにかなる方法はないのか？」

俺はすぐりつくような目線を委員長に向ける。

「ないわ」

「即答！？」

視線すら合わせてくれない！？ 血も涙もねーのか！？

「……………ダメだ……………もう死のう……………」

「……………と、言いたいところだけど、……………って、聞いてる？」

委員長が何か言ってたみたいだけど、俺はすでに現実から逃避していた。

「もうダメなの！ 一生童貞なんて、ボクには耐えられないの！」

「あー、もしもし？」

「もうボクに構わないで！ もう決めたの！ 死ぬの！ 飛び降りるのよー！」

「……………」（イラッ）

「いやあ！ 止めないで！ ボクを止めないでえー！」

「……………いい加減にしないと一生童貞にするわよ？」

「すみませんふざけすぎましたゆるしてください」

一気に現実に戻されたぜ……………。死ぬ気なんてありませんよ？ ちょつとふざけただけです……………ん？

「『と、言いたいところだけど』ってことは……………もしかして続きがあるの？」

「あるわよ！ 聞くの！？ 聞かないの！？」（イラッ）

「聞きたいに決まってる！」

「次ふざけたら一生童貞だから」（ニツコリッ）

委員長は笑顔ながらも眉毛を引きつらせていた。笑顔が怖いとはこのことだ……。

そんなに怒らなくてもいいじゃない。ぐすん。

でも怒った顔も可愛いなあフヒヒ。

「あなたはこれから脇役として生きていくのよ」

「……脇役、だって……？」

「そう。物語には必ず必要となる脇役。それをこれから演じていくの」

「どういうこと？」

よく判らん……。

「あなたはすでに主人公時間を使い切った。つまりあなたには主人公になる力が残ってない。それでも主人公になりたい。そう思うなら方法は一つ。他者の物語に入って脇役を演じること」

「他者の物語？ 脇役を演じる？」

「主人公の人生に大きく影響を与えるような名脇役は、それなりの力を得ることが出来るわ」

「つ、つまり……どういうことだってばよ……」

俺の頭上には“？”マークが大量に浮かんでいることだろう。

「簡単な話、他者の物語に入り込んで活躍し、人気者になればいいってこと」

「人気者になると、どうなるんだ？」

「例えばドラマの脇役が人気になれば、その脇役を主人公にしたスピンオフ作品が作られることがあるでしょ？ それと同じことね」

ふむ。なるほど、実に分かりやすい。

「判った。でも一体どうやって脇役になればいいんだ？」

「これから主人公時間を迎える人と仲良くなつて、恋愛の手伝いをすればいいの」

「そういうことね」

よくあるパターンで安心した。……よくあるのか？

「他者の物語にどんどん入って活躍すれば、いずれスピンオフが作られるかもしれない。でも、それはとても大変なことよ？ 主人公の期待、信頼に全力で答えないといけないのだから。あなたはどうする？ やってみる？」

どうやら俺の主人公時間はもう無いらしい。このままだと一生独身だつて！

そんな人生はまっぴらご免だ！

ならば答えはひとつしかないだろう！

「やるに決まってるんだろ！ 名脇役になってやるぜ！」

なんとしても主人公に戻ってやる！

それに脇役ついても、ただ恋愛成就の手助けをするだけだ！  
なんてことはない！ ……はず！

……ん？ 不意に疑問が俺の脳裏をよぎった。

「なあ、なんで俺に主人公時間がないこと、教えてくれたんだ？

お前にとつてはどうでもいいことだろう？」

「ええ、確かにどうでもいいわ」

……なかなか辛口な巫女さんだな。そこがまた味がある！

「でも、あなたには興味があるの」

「俺に興味！？」

うはっ！ 久々に俺の青春が来たか！

「あなた、色々と雑用してくれそうだからね」

……そういうことね。まあ期待はしてなかったよ。何せ主人公じゃないもんね……。

「私は縁結びを司る神様の巫女なの。我が家は代々縁結びの神様を奉っていて、神様の手伝いをするのが仕事なの。でもね、最近仕事に滞っちゃって。一人では限界を感じたから、あなたに手伝ってもらいたい。それがさつき言った『脇役を演じること』。それであなたは主人公に戻る。私も楽できる。一石二鳥だとは思わない？」

「なるへそ。そういうことだったわけね」

ふーむ。要するにバイトみたいなものか。給料はお金の代わりに  
主人公時間。

「では来週から行動開始よ！ 手順や注意事項はその時に伝えるわ」  
告白失敗、衝撃の事実から一転、この急展開。

いやあ、人生ってどうなるか分からないものですねえ……。

そんな俺の人生よりも、一つ気になっっていたことがある。

「ところでさ、何で巫女服着てるんだ？ しかも何故黒？ 神様に  
仕えているからとか、なにか複雑な理由が？」

「 ただの趣味よ！！」

「なんだってーーーー！！」（三回目）

二度あることは、やっぱり三度あったね。三度目の正直なんてこ  
とわざは知らん。

## 第一話 巫女さんは委員長

「ふわあ~~~~」

おもみや 主宮高校に通う俺、里美公太は、人気の少ない朝の教室で、恥ずかしげもなく大きな欠伸をしていた。

ね、眠すぎる……。昨日、寝たの三時だもんな……。そりゃ眠いつて。

なんだか考え事が多くてね。特にここ最近、色々とありすぎて……。告白失敗とかね。それと

委員長が巫女さんだったりとか！……俺が二度と恋愛できないのだから……。いのだとか……。

なんだかんだでショックが大きかったんだよね。だからこそ、今日は早めに登校してきたわけだし。

そうだ、先週の巫女さん。彼女の話しよう。彼女は……って、ちょうどいいときに登校してきた。

「おはよう、公太」

目の前に立つ女子の名は縁朱夏<sup>えにししゅか</sup>。我がクラスのクラス委員長を務めていて、顔良しスタイル良し、性格良しの黒髪短髪の似合う、学校中の人気者だ。

「公太。判ってるでしょう？」

自覚しているのかっていう目ですね……。もちろん判ってますよ！ 今日から脇役人生スタートなんでしょう？

「私が巫女コスプレをしたこと、喋ったら 殺すわよ?」

「そっちの話!? あれ、すごく良かったのに……。出来ればみんなに広め」

「判ってるわよね?」(ニツコリ)

「……はい」

無意識に首が縦に振幅していた。怖ええ……。話を変えよう……。

「委員長。先週言っていた手順や注意って、一体何なんだ?」

「私のことは朱夏でいいわ。これからはパートナーだもの。私もあなたのことは公太って呼ぶから」

いきなり名前で呼び合うだとも!? なんてハイレベルな!

「それはさすがに恥ずかしいぞ!? 委員長」

「……何照れてるの? これからは当分仕事を手伝ってもらわなければならぬし、何より公太。あなたはもう主人公じゃないのよ? 照れる要素ないでしょ」

「ふぐっ!」

「だから安心して名前で呼びなさい」

「……わかったよ、朱夏……」

「理解できたならよろしい。詳しいことはまた後で話すわ。とりあえず主人公を見つけないとね。今はまだ見当たらないけど近いうちに現れるはず。主人公が現れたら、私はすぐに分かるから、見つけ次第連絡するわ。……いい? コスプレのことは内緒よ!」

やけに念を押して、自分の席に戻っていったな。そんなに隠すのか?

「……急に名前で呼べとか、コスプレしていること隠せとか、まったく女の子の気持ちはわからんなあ……って!?」

突如視界を塞がれた。この硬くてこつこつした感触は……。



「おう、公太。金曜日はどうだった？」（だきっ）

「（だきっ）じゃねーよ！ 朝っぱらから鬱陶しいんだよ！ ドラ！」

黒光りする筋肉質な腕を振り払う。えーい、離せ！ 男に抱かれる趣味はねえ！

「つれねえなあ、三日ぶりの再会だというのに」

「やかましい！」

俺の視界を塞いだ張本人、馴れ馴れしくてムキムキなこいつの名前は浅間龍二あさまりゆうじという。

学校一体格が良く、スポーツテストでも常に上位成績。反面、学力は最下位。

趣味は筋トレとギャンブル全般。麻雀が好きで、名前にも龍とあることから、俺たちはドラと呼んでいる。

いかつい外見や、過去にやんちゃしてたという噂のせいで、皆からは敬遠されている。根はいい奴なんだけどね。

「どうだったんだよ？ 成功したんだろ？ あの雰囲気で失敗なんてありえないからな！」

「……うつ！」（グサッ）

そうだった。まだ皆には話してなかった……！

「ま、まさかお前、成功を通り越してすでに性交までしたんじゃ……。週末を利用して彼女としつぱりな関係になったとかねえだろうな……！？ ま、まだ早いぞ！」

「は、はは」

笑うしかねえ……。イテエよ、心がよあ……。

「羨ましいねえ！ こいつう……！」（ぐりぐり）

「止めるドラ！ いてえ！」

痛い痛い、ほっぺたに指を突き立てるな！ そしてこれ以上俺の心の傷を広げるな……！

くそう！ こいつどれだけ力があるんだ！ どけようとしてもビクともしないとはっ！ 誰か助けて……！

「ドラ、公太が痛がつてるよ」

「その声は　優!!」

助けがきた！　俺はその救世主へと視線を送る！

長髪をポニーテールのように後ろで纏め、長身でモデルのようなスタイルの眼鏡が似合う、このイケメン。名前は和久井優<sup>わくいゆう</sup>という。優という名前の通り、成績優秀、運動神経抜群の超優等生なのだ！ちなみに俺と優は幼稚園からの付き合いで一番の親友なのだ！ほらほら、親友が困っていますよ！　さあ、助けておくれ！

「公太、面白い顔だねえ。ドラ　もっとやれ」

ちょっと性格が歪んでいるのも彼の魅力だ!!

「あいよ！」（ぐりぐり）

優の号令と共にさらに腕の力を強めるドラ。

「うらぎりものー!!　痛い痛い!!」

「　なんて冗談だ。ドラ、もういいだろう?」

「そうだな。ほら、解放だ、公太」

助かった……。ドラめ、憶えてろよ……!

「それよりも公太。どうだった?」

「ギクッ」

「……どうだった?　って。もちろん告白のことだよな……。」

「……うっ、どう言ったらいいんだろう……。」

「……その様子だと”また”振られたのか」  
「ばれた!？」

「はあ!？ ああ、霧囲気の中、振られたのか!？」

ドラの言うあの霧囲気とは金曜日の放課後のことである。

皆が祝福し、誰もが新カップル誕生を祝う（一部妬みの視線はあったが）ムードだったのだ。

「……ああ、振られちゃったよ」

うなだれる俺。

「マジか……」

「そうか。それは残念だ」

二人は、それがまるで自分のことかの如く、俺と一緒に落ち込んでくれたんだ。

お前ら、そこまで俺のことを心配してくれて……!（うるっ）  
こういう時こそ、俺が元気になって二人を安心させて上げない!

「二人共、心配してくれてありがとな!! でも、そんなに落ち込まないでくれよ! もう過ぎたことなんだし」

「じゃあ優の負けだな。学食のBセット、よろしく!」

……えっ?

「まさか麻雀と喧嘩以外でドラに負けるとはね」

「ハハハハ、俺はギャンブル全般に強いからな!」

あれれ? 君ら、ひょっとしてボクで賭けをしていました!?

「まさかまた公太が振られるなんて計算外だ。今回は僕も手助けし

たし九割は決まるところだ。確立はあくまでも確立つてこ  
とだね」

「ギャンブルは計算じゃないからな。流れつてもんがあんだよ」

「ドラはいつも流れに恵まれすぎなんだよ」

……ぐすん……。どうしよう……。涙が止まりませんことよ……。

賭けに負けた優は、おもむろに財布から千円札を取り出して、ド  
ラに手渡した。

「お釣りはいらさないから」

「サンキュ、優」

無駄にイケメンだな！ おい！！

俺は今、友情とはどうあるべきかを考え直すべきなのかも知れま  
せん。

「ドラ、お釣りで公太にも何か買ってあげてよ」

「そうだな、どうせなら全額、公太のために使おうか！」

やっぱり大親友だよ！ 二人共！！

「ふー、今日も終わったか」

授業が終わって帰りのHRが始まるまでの時間って、一番リラッ  
クスできるよね。この解放感がたまらんね。

「そういえば今朝以降、朱夏から何も接触がなかったな。……あ、  
ウルモフ」

そう考えたとき、教室に担任が入ってきた。

「席につけー」

担任の蒙古先生。007のウルモフ將軍に似ていることから、  
皆からはウルモフと呼ばれている。

日直の号令の後、ウルモフの楽しい楽しい説教半分のHRが始ま

った。

必要事項とちよつとした小言の後、頭を掻きながら面倒くさそうに現在一番重要である案件を口にした。

「……あー、三週間後には学園祭があるだが、うちのクラスだけ出し物が決まってる。お前ら一体どうするつもりだ？」

三週間後、我が校の学園祭が二日にわたって開催される。

でも我がクラスは、どうにも個々の自己主張が強すぎるというか、纏まりが欠けているというか……。

「Zzz……」

……優は寝てるし。

「腹減った……。もう我慢できん!!」

……ドラはこっそりとパンをかじり。

「盗まれてるー！ー！？」

……朱夏はケータイゲームに夢中。

我がクラスはこんな奴らばっかりなわけでした。未だに出し物が決まってるのだ。

「このままでは何も出来なくなってしまうぞ！ 誰か良い案はないのか!？」

ウルモフが怒鳴り、静まり返る教室。無理も無い。

何故ならこの質問は、今まで幾度と無く繰り返されてきたものだからだ。

実はこれまでに幾つも案は出されてきた。しかし、その度に男女間で論争が繰り広げられ、対立。結局纏まらず廃案になってきたのだ。

次第に誰一人として案を出さなくなり、現状に至る。

「……はあ。お前ら、残りは三週間しかないんだぞ？ 本当はどう

するつもりだよ」

ウルモフもいい加減にしろといった表情で嘆息している。そうは言ってもなあ……。

そんな中、クラス委員長である朱夏が、唐突に立ち上がり提案した！

「占いをやりますー!!」

「……占い？」

女子（テニス部）「あ、それいいかも！」

女子（ラクロス部）「私、賛成！……和久井君との相性……占ってもらおう……フフ」

女子（相撲部）「それちょべりぐー」（死語）

女子の間から賛成の声が上がる。なるほど、女の子は占いが好きだもんね。

しかし、男子の間からは反対が噴出。

男子（サッカー部）「占いなんてつまらないだろ！」

男子（野球部）「ソノヤーツス！」（そんなのやる気でねーツス）

男子<sup>オタ</sup>「デュフフ、それ、リア充しか喜ばない内容ではないですか」

K。ねえ、公太氏い」

……リア充ってなんだ……？

優「Z Z Z……」

ドラ「はぐはぐはぐ うっ!! 喉が……!!」

と揃って野次を飛ばした。この流れはいつもの論争パターン

……！

「おいおい、大丈夫かよ……」

心配して朱夏を見ると

わ、笑っている！？ この状況を！？ なんだあの冷徹かつ  
余裕な笑みは！？

次第に大きくなる男子の声。そんな中、朱夏は凜として言い放つ  
た！

「 巫女服」

「 「 「 ！？！？ 「 「 「

この言葉に反応しない男子はいなかった。騒々しかった教室が、  
一瞬にして張り詰めた空気に変わる。

「 みんな、よくお聞きなさい！！」

「 ぐふっ！」

朱夏はウルモフを押し飛ばして壇上に上がり、力強く演説を始め  
た！

…… 大丈夫か？ ウルモフ……。

「 占いで最も大切なこと。それは雰囲気よ。タロットにしろ、手相  
にしろ、客に神秘的な雰囲気を感じさせることが一番なの。そのた  
め非常に重要になるのが衣装。そして日本人がこよなく愛する神秘  
的な衣装。それは一体何？」

「 巫女服です！」

と誰かが元気よく答える。…… ドラだった！

「 その通り！ だからこそ 」

ゴクリという音が聞こえてくる。やはりドラだった。もはやドラの眼は龍のように猛々しい。……てか血走ってるだけか。クラス全員の視線を一身に浴び、朱夏はとどめの一言を言い放った！

「女子は全員、巫女服を着ます！」

「『賛成だー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』」

男子たちは大いに叫んだ！ 魂の叫びって奴だね！

この叫びの中には、もちろん俺の声も含まれている！ 一番大声を上げていたのはドラだったが。

女子（相撲部）「ちよつち男子ガチうるさいんですけどー、チヨベリバ〜……」（そろそろウゼエ……）

女子（ラクロス部）「ちよつと巫女服着てみたかったしいいかもね！ 男子にはドン引きだけど！ ……和久井君に見せつけよ……フフ」

女子（テニス部）「巫女服、楽しみだね！」

意外なことに女子たちから反対意見は出なかった。みんな巫女服に興味があつたんだね。優以外。

……というかこんな大歓声の中、寝続けられる優ってすげえ……。

我がクラス初、満場一致でクラスの出し物は占いに決まったのだった。



## 第二話 主役はホツチキス

「公太」

怒涛のHRが終わって間もなく、朱夏が声を掛けてきた。

「とうとう現れたわよ、主人公が。しかもこの教室に」

「なんだって！？ もう主人公が！？ しかもこのクラスだと！？」  
「やばい……緊張してきたぞ……」。

朱夏には主人公時間を迎えた人間がわかるらしい。一体誰なんだ……！？  
今は放課後。教室に残っているのはごく僅かだ。

「この中に主人公が……。だ、誰なんだ？」

緊張が走る。喉が渴く。何せ俺はこれから当分の間そいつのサポ  
ートに徹する脇役にならねばならないわけだ。見知った顔なら幾許  
かはやりやすい。

朱夏が人差し指を立て、ゆっくりと矛先をターゲットに向ける。

「主人公は………あいつよ！！」

朱夏が指を差した生徒。あの姿は……。

「……マジですか……！？」

俺の目に映った生徒。それは我がクラスで最も影の薄いと称され  
た男。

「マジよ。今回の主人公。それは　ホツチキスよ!!」

「……………ホツチキスだと……………!!」

ホツチキス。本名は確か倉敷啓……………だったはず……………。

クラスで最も目立たないのに、皆勤賞。

そして”何故か常にハサミやホツチキスを持ち歩いている”という”目立たない奴あるある”を総取りしたかのような男なのだ。それゆえに付いた仇名が”ホツチキス”。

「大丈夫なのかよ!?　ホツチキスだぜ!?　あいつが誰かと会話しているところすら見たこと無いんだぞ!?」

「でもやるしかないのよ?　でないと一生　」

「やります!!」

……………その先を言われるのがとにかく怖いぞ……………。

「そしてヒロインは　ああ。あの子ね。……………ププッ!!」

「ヒロインだつて!?　ホツチキスの相手のことか!　朱夏さんや、何で笑っているのですかな!？」

「ハハハハッ、ヒー、お腹痛いわ……………!　ごめんなさい、だつて今回のヒロインって、先週公太が振られた相手なのよ。これはまた災難ね!!　ハッハハハ」

「……………お前、同情する気すらないだろう……………」

朱夏は顔を真っ赤にして笑っていたが、俺の顔面は蒼白になっていた。血の気が引いていくのがわかる。

「そんなのって、ありが?　まだ心の傷、癒えてないんだぞ!？」

「仕方ないでしょう?　もう決まっただから」

先週、俺が振られた相手。それはクラスでも朱夏と人気を二分するほどのアイドル的存在。

「そんな……まさか 巡崎さんだなんて……!!」

めぐりさきみと  
巡崎美都。それが彼女の名前だ。あだ名はみつちー。

美術部所属で、在学中に多くの賞を受賞している我が校きつての天才だ!

それでいて自分の才能を鼻にかけることもなく、おっとりとした性格で誰にでも優しく、男女問わず大人気のアイドルなのだ!

それに付け加え、あの高校生離れしたスタイル。胸もデカイ事も然ることながら、特筆すべきはあの尻!! 素晴らしきかな安産体型で、モロ俺の好みだったのだ!!

そう、俺は尻フェチなのだ!!

「信じられん! だってあの巡崎さんだぞ!? ホッチキスとなんて考えられん!!」

「でもホッチキスなのよ。これはもう変えようのない事実。……そうだわ、公太にもこれを見せてあげる」

そう言って朱夏はバッグの中からヘンテコな形のメガネを取り出した。

「見縁メガネ」くく!!」

「……なんだそれ?」

ドラえもんがポケットからアイテムを出す時のSEが脳内に響き渡った。

「このメガネはね……。なんと! 人の主人公時間を見ることが出

来るのです!!」

「見縁みえんのに見えるのか!？」

「ふふふ、洒落が聞いていて面白いでしょ？」

いや、そんなに面白くないけど……。

「そんな便利な道具があるのか!？」

「そうよ。公太、これでホッチキスを見てみなさい。面白いものが見えるから」

俺はおずおずとメガネを手に取り、そっと掛けた。

「見えてきたでしょ? ……」縁の糸”がね……」

ホッチキスを見る。特に何も変わった様子はない。……だが。

「……………おお!？」

見えた! 微かにだけ間違いなく! ホッチキスの左手薬指から、赤い糸が伸びていた!

「なんだあの糸! あれが縁の糸っていうやつか!？」

「そ。主人公とヒロインを繋ぐ糸よ。運命の赤い糸っていうのは、これが由来なのよ? 主人公の糸が、ヒロインの指に結ばれたら晴れてカップルになれる」

「ふむふむ。でも、その糸と主人公時間ってどう関係あるの?」

「糸の長さ」主人公時間の長さなの。糸が長いと、それだけヒロインの指に近づきやすく、結ばれやすい。そうイメージしてもらって構わないわ」

へえ、へえと、俺はエアへえボタンをバンバン叩く。

「しっかりと見てみて。ホッチキスの糸がどこに繋がっているかを」

……予想は出来ているけどね。でもこの目で見ないと信じられない。

「……ああっ！」

予想通りの結果が突きつけられる。ホッチキスの糸は 巡崎に繋がっていた。

「分かったでしょう？ ホッチキスの糸は、みっちーの指に結ばれている。だからホッチキスが主人公で、みっちーがヒロインってこと」

……分かっていたとはいえショックだ……。

だってそうでしょう！？ ボク、コクったの三日前なのよ！？

「そうだ公太。自分も指を見てみなさい。一目瞭然よ」

え……、ボクの指……？

恐る恐る自分の指を見ると……。

「ない！ 赤い糸どころか、その糸屑一つない！！」

「そういうこと。それじゃヒロインと結ばれるどころか、結ぶのに必要な長さすらないでしょ」

「そういうことなのね……」

改めて自分の境遇を突きつけられた感じだったね。だって、一ミリもないんだよ？ 縁の糸。

「ちなみに私はメガネなしで見ることが出来るわ。それが私の能力なの」

「能力！？ なんかかけえ！！ 能力者バトルが出来るってか！？」

「……出来ないわよ。はい、メガネ返して。分かったでしょ？」

確かに見えた。まだ細く、薄っすらとだが、でも間違いなく縁の糸は繋がっていた だが！

「それでも納得できるか！ それに俺はまだ彼女のことを」  
「諦めてないの？ どんなことをしたって、絶対100%無理なの？」

「し、しどい！ そこまで言わなくても！！ 鬼！ 悪魔！」

「巫女です」

「そうでした」

……俺、案外余裕なのか？

「公太が諦めていようがいまいが関係ないの。もう縁の糸は繋がったのだから」

分かっている……。分かっているよう……。！ だけどう……。。

「やらないと一生ど」

「やらさせていただきます！-」

背に腹は変えられん！ 今しがたの辛抱であるぞ！ 頑張れ、俺！  
「でも、俺はまだ手順なんて聞いてないぞ？ どうすんだ？」  
「とにかく今は声を掛けるだけでいいわよ。少し会話したら戻ってらっしゃい」

それが一番難しいんだよ……。ホッチキスと会話したことなんて。

『ホッチキス貸して！』『はい』『ありがとう』

……くらいしかないしな……。

とにかく俺の人生が掛かっているんだ。声を掛けるだけ掛けてみよう。後は何とでもなれだ！

「あ、公太。一つだけ注意事項を言っておくわ」

勇む俺を朱夏が止める。俺が朱夏に視線を返すと、朱夏は真剣な眼差しを向けてきた。

「絶対にみっちーと付き合わないで」

！？

「それはどういう意味だ！？　そもそも脇役はヒロインと付き合えないのじゃ？」

「そう。付き合えない。でもね。付き合うに至るまでは常人と同じなのよ」

付き合いに至るまで……？

朱夏は話を続ける。

「主人公時間のない人間でも、付き合う前までは普通に誰とでも接することが出来る。でも、いざ付き合うとなると話は変わってくるの。告白やキス、それに準ずる行為は全てNG」

「つまりどういうことだ？」

「それは主人公のヒロインを奪ってしまうことになるから」

「……ヒロインを……奪う……？」

「そう。今回の場合、公太がみっちーに告白したり、されたり、キスしたりすると全てが終わりってことね」

「……ありえるのか？　そんなこと」

「ありえるわ。先に言った通り、付き合うまでは普通に接することが出来るの。絶対に忘れないで。主人公のヒロインを奪ってはいけない。たまにあるのよ。我慢できなくなって脇役がヒロインを」

「

「絶対にしない！　するわけないだろ！！」

俺は一度巡崎に振られているんだぞ？　ありえないって。

「そう。なら安心ね。でも公太、気をつけなさい」

朱夏はさらに険しい表情になり、言葉を続けた。

「主人公やヒロインは脇役次第で大きく心境や行動が変わる。公太のちよつとした間違つた行動が、後で大きく響くこともある。公太が良かれと思って行動しても、それがマイナスに働くときもあるの。こればかりは予測できない。だからとにかく気をつけなさい」

「……判つた……」

俺が良かれと思つてもマイナスに働くこともある、か。気をつけなきゃな……。

「だからといって萎縮しちゃだめよ！ 最初はとにかく目立つこと！ それだけを頭に入れておきなさい！」

気をつけながらも、とにかく目立つ。こいつぁ、ハードだぜ！

「では公太！ 早速行動開始よ！ 行つてきなさい！！」

「ああ！！」

ついに始まる俺の脇役人生！ 一生童貞は嫌だ！ 絶対に主人公に帰り咲いてやるぜ！

名脇役への第一歩。それはつまり、主人公と仲良くなること！

今までまともに話したことはないけれど、なんとかなるだろう。いや、なんとかしよう！

いくぜ！！ 俺！！

「なあ、ホッチキス！」



「……………な、何かな、里美君……。何か用……。!?」

そりゃ驚きすぎだつて、ホッチキス。俺から声をかけられるのがそんなに珍しいか?

……珍しいよな。俺だつて久々に話しかけたんだから。

「いや、用があるつてわけじゃないんだ。ただ……」

「ただ……?」

「……………」

「……………?」

うつ。予想以上に会話が持たない……。

そつだ! こういうときは共通の話題を振れば無難だ!

まずは これで攻めてみるか!

「数学の授業、眠かったよな!」

「……僕はそうでもなかったんだけどな」

何ですと!? あの数学が眠くないとな!?

「で、でもさ。微分とか積分とか、聞いてるだけで眠くなるだろ?」

「そんなことはないよ……。僕、理数系の大学目指してるから微積分は勉強しているし……得意なほうだよ?」

「マジか! じゃあ今日の宿題の答え、見せてくれよ!」

「あ、うん……。別にいいけど……」

よつしゃ! これで今回は優に借りを作らずに済むぜ!

……って目的が違う! そつじゃないだろ、俺! 何か話題を  
そつだ!

「体育のサッカーはどうだった？ 楽しかったよな！ 何せ俺はハットトリックを」

「僕、運動は得意じゃないから……あまり楽しくなかったよ……。里美君は運動できるから羨ましいよ……」

サッカーが楽しくなかっただって！？ 俺なんて体育がなかったら学校に来ないくらい楽しみなのに！

俺と好みが正反対だなんて……！ ダメだ、仲良くなれる気がしない……。

くそ……ひとまず話題を変えるぞ……！！ 次は これだ！！

「ウルモフ、どうなったかな？」

朱夏がHRにて押し飛ばしたウルモフは、勢いのままに頭から転倒、保健室へ運ばれていた。

「そう言えば、どうなったんだろ……心配だね……」

「ああ……心配だな」

「そうだね……」

……は、話が続かねえ……。

その時、唐突に教室の扉が開いた！

「痛たたた……、まったく委員長の奴、無茶苦茶しやがる……！」

気まずい空気の中、頭に氷を当てたウルモフが教室に戻ってきた。

「ウルモフの兄貴！ 無事だったのか！ てっきりフィリッピンで戦死したのかと……」

「誰がウルモフだ！ 勝手に殺すな！ しかもそれ、”はだしの

ン”ネタだろ?”

「よく知ってるな……、ウルモフ……」

「お前もな……。そいやお前ら帰宅部だろ？ さっさと帰って勉強でもしとけ」

それだけ言つとウルモフは顔をしかめて教室から出て行つた。

「ウルモフ、無事だったな……」

「……そうだね……」

またもや気まずい空気。

こんな空気、耐えられねーよ！ ダメだ、さらに仲良くなれる気がしない……。

……！！  
待て待て、ここで諦める訳にはいかん！！ とつておきの話題を

「昨日のプロ野球の試合、見たか？ 我らがジャイアンズムの圧勝でさ！」

押売魔神ジャイアンズム！ 他球団の良選手を悪魔の誘いで（金の力）で引き抜き、圧倒的財力でリーグを勝ちぬく俺の好みの球団だ！

「いやー、良かったよなあ……。何せ打順1〜8番までの全員が去年まで他球団で4番だった選手だもん！ まさにオールスター！」  
俺が嬉々として話し出すと、それに反比例するかのようにホッチキスの表情は沈んで行つた。

「……僕は相手のタイガルドズのファンなんだ……」

なんだと！？ タイガルドズファンだと！？ 天敵ではないですか！

関心タイガルドズ。ジャイアンズムとは正反対で選手一人ひとりをじっくりと育てる地味な球団だ。俺の趣味に合わん！

「ジャイアニズムズは少し強引すぎるよ……。野球はタイガルドズみたいに選手を大切にしなきゃ……」

「そ、そうか？ 俺はあの傲慢なプレイスタイルが大好きなんだけど！」

ジャイアニズムズとダイガルダズは因縁のライバル、犬猿の仲なのだ！

無論、そのファン同士の仲だって悪い！ ダメだ……。もはや仲良くなれる気がしない……。

「……里美君……。僕、帰るね……」

「お、おう……。じゃあまた明日な……」

ホッチキスは早々と教室から出て行った。

「このバカ!!」

「ゴボウアツ！」

なんだ！？ すごい音がしたぞ？ ……って、いてえ!!

「何なの、あのやり取りは！ 新手のコント!？」

怒号を上げる朱夏が、俺の腹に見事な正拳突きをお見舞いしていた。

「……グフ……。みぞおちじゃなくて良かった……。って、何も殴ることは無いだろ！」

「公太、やる気あるの？ ホッチキス、完全にあなたのこと呆れてたわよ？」

「仕方ねーだろ？ 話すことがないんだからさ！」

「それにしたって空気を読まなさ過ぎよ！」

無茶言つなよ。俺だつてこれでも頑張つたんだぜ？

……などと言える空気ではないことは読めた。

不機嫌な朱夏だったが、しばらくすると何かを閃いたような表情に変わる。……嫌な予感。

「公太。あなた今までずっと主人公をしていたでしょ？ だから脇役に慣れてないのよ」

「うゝむ。そうなのか？ 今まで主人公の自覚なんてなかったけど」「自覚がないってほどに、主人公してたのよ。さすがは”元リア充”ね」

「リア充って、なんだ？」

「……！」

「お、おい？ 朱夏、どうしたんだ？」

一体どうしたんだ！？ 朱夏がなにやらブツブツ言いながら震えている！？

……ん？ どうして拳を握り締めているんだ？ ……って、グオエエエツ……！

今度はみぞおちに入った……。い、息がでкин……！！

「……だ、だから……な、んで殴るんだ……？」

「ふん！」

倒れこむ俺を見下しながら、腕を組む朱夏が言い放つ。

「リア充という言葉を知らない時点で、リア充なのよ……な」  
んで私がこんな説明しないといけないの……」

「な、なんでそんなに怒っているんだよ……？」

「うるさい！ リア充ってのは昔の公太見たいな奴のことを言うの

よー！！ モテモテでウハウハで毎日がリアルに充実していたでしよ  
う？」

朱夏は俺にびしつと突きつけて、言い散らす。

「でも良かったわね！ あんたはもう立派な”元”リア充よー！！」

「”元”言っつな！ 今だつて十分そのリア充つてやつだ！」

「主人公時間が無いんだもの。これからは一生リア充になれないか  
もよ？ とすると一生童貞」

「止めてくれー！！！！」

「これからのためにも脇役の何たるかをしっかりと教える必要があ  
るわね……」

聞きたくない！ 教えてほしくないぞ！ そんなこと！

「公太、これからね」

「あー、あー、聞こえません！」

えーい！ 耳を塞いでやる！！ 俺にはもう何も聞こえん  
：

…！？

「グエエツー！！」

またもや腹パン。ちよつと殴りすぎじゃないですか！？

「ちゃんと聞きなさい」

「はい……」

暴力反対！ と言える空気でないことも分かる。

うん。やっぱり俺、空気読めるじゃないか！

「いい？ 公太、これからね」

「はい……」

「うちに来なさいー！！」

「はい………ええっ！？」

と言つことで、俺は半ば無理やり朱夏の家に行くことになつ  
たのだ。

### 第三話 巫女さんはコスプレ好き

「おいおい、どこに行くんだよ!？」

「どこって、私の家に決まってるじゃない。もうボケた？」

朱夏の自宅に誘われ、ついていくこと小一時間。

俺たちは何故か山道を歩いていた。

「ボケてませんよ!？ どうしてこんな獣道を歩いているのかと聞  
いてるんだ!！」

「いいから黙ってついてきなさい」

生い茂る草木を掻き分けながら豪快に進む朱夏。とにかく見失わ  
ないようにしないと……。

道無き道を進むことおよそ30分。

「着いたわよ!」

「やっと着いたか……疲れた……」

必死に山道を抜け、辿り着いた場所。そこには

巨大な鳥居と千年杉に囲まれた神社があった。

「神社なのか!？」

「ええ。言っただでしょ？ 私の家は代々縁結びの神様を奉っている  
つて。ここ”縁神社”が私の家」

「ほえー」

大きな鳥居に蔽かな社。辺りは静かで、聞こえてくるのは虫の声。  
こんなに落ち着く場所がこんな山の中に あれ？ この景色……。

「俺、ここに来たことあるぞ!？」

「そうなの？ 何しに？」

「何しに、って決まってるだろ!？ 縁結びの祈願をしにだよ！

それよりも、一体どういうことだ？」

「どうということって？」

「ここには階段があるじゃないか！ 何故階段側から上がらなかったんだよ!？ そもそも何故山道を通った!？」

俺は激しく追及したつもりだったのだが。

「山道の方が近道なの」

「……時間にしてどのくらい？」

「およそ5分」

しれっとほざく朱夏に怒るのも馬鹿らしくなる。

「……それくらい我慢して階段から上がろうぜ……」

俺の呟きを無視して、朱夏はそそくさと社務所の中に入っていく。後を追って恐る恐る玄関に入る俺。

「お、お邪魔しまーす……」

他人の家の匂い。それだけでも緊張するのに、女の子の家だもんなあ……。心拍数上がるよ。

昔、彼女がいたときは、色々と事情があって家へ遊びに行けなかったからね。

『公太、こっちこっち』

「お、おう」

先に家に上がった朱夏が、玄関で佇む俺を呼ぶ。



「どこだ!？」

『一番奥の部屋だから!』

廊下の奥から声が聞こえた。  
なるほど、あの部屋ね……。

「……………緊張するぜ……………」

女子の部屋か……。雑誌や女子の会話とか聞く限り、さぞ可愛らしい部屋なんだろうな!

あれだろ? ぬいぐるみ! でっかいクマとかあってさ! 枕元にたくさん置いてあったり!

寝るときはお気に入りのぬいぐるみを抱いて寝るとか! そんな可愛い部屋なんだろう!?

そんな場所に踏み込む……。ワクワクが止まらねえ!!

「……フ、フオオオオオ……」(妄想中)

「あのー。人の部屋の前で変な声あげないでくれる?」

あ。声に出ていたのか。

……よし。行くぞ! ちゃんとノックして

「朱夏、入るぞ?」

「着替え中」

「……………」

先に言え! なら誘うな! ……という叫びは心の中で抑えよう!

今の世の中、女子の着替えより優先されることなど存在しないのだ!

待つことおよそ3分。待ちわびた時間がやってきた。

「入っていいわよー」

ようやく着替え終わったか。さて、早速入れてもらうとしましょう。

俺はドアノブに手を掛け、ゆっくりと回す。緊張の瞬間だね。

この扉の向こう側には、きっとファンシー溢れる世界が広がり、心地よい香りと共に俺を歓迎してくれるに違いない！（童貞の妄想）

さあ！ この感動をこの目に焼き付けるぞ！！

「お邪魔しま すっ！？！？」

俺は戦慄した。

扉を開けると共に鼻を突いた、なんとも籠った匂い。部屋の光景を目の当たりにし、妄想のファンシー世界は、現実の前にあたかも崩れ去った。

「…………マジかよ…………」

「ん？ まあ、適当に座つてよ」

「適当に座れだど！？ どこにそんなスペースがあるんだ！！」

床には食べ終わったお菓子の袋とか、ペットボトルとか！ コンビニの弁当もそこかしこに散らばっていて！

ティッシュペーパーを丸めたゴミ、DVDケースや服、拳句の果てには汚れた靴下まで散乱してるし！ 一人暮らしのおっさんか！？

んっ？ これはコスプレ用の衣装か……。巫女以外にもたくさんある……ってありすぎだろ！？

壁には作りかけであろう衣装やウィッグが大量に掛けてあり、しかも数が多すぎて窓が塞がっている！！ 光が入らねえ！！

「……………」(放心中)

「公太、どしたの？」

「なんだこの部屋は————っ?!?!?」

俺は無意識に叫んでいた!!

「レディに向かって、何だとは失礼ね！」

「それはこっちのセリフだ!! 男の夢や妄想をぶち壊しやがって!!」

「知らないわよ、そんなこと。私の部屋なんだから、公太には関係ないでしょ? そんなことより作戦会議よ!! ささ、始めるわよ!!」

「こんな周りが気になりすぎる部屋で作戦なんて立てられるか!! あれはなんだ!?!」

壁に掛かった大量の衣装を指差す。

「何なんだ!?! この大量の衣装は!?!」

「言ったでしょう? コスプレが趣味だって!」

「巫女服は!?! 神社の家の娘だから、とかもって深い理由はないのか!?!」

「……………」

急に静かになった朱夏。鋭い視線が俺を刺す。あれ? もしかして地雷踏んだ?

「……確かに神社の家の娘として、巫女になることもあるわ。それに他の衣装だって仕事で着ることもある」

「……仕事?」

「……………」

呆れ顔の朱夏。はて、仕事……？

「もう忘れたの？ 最初に言っただけ。私は縁結びの神様に仕える巫女として、仕事をしてるって」

あー、そういえばそんなこと言ってたね。あの時はショックな出来事が色々とありすぎて記憶が曖昧なんだよね。

「私の仕事。それは、誰かの脇役になって、恋愛成就のサポートをすること。私は今までずっと誰かの脇役を演じてきたの。生まれてからずっと、ね」

「生まれてからずっと……？」

「そうよ」

……朱夏はしれつと言いのけたけど、それってかなり辛いことなんじゃないか？ 脇役がどんなものか、俺にはまだ分かんないけどさ。

「主人公には様々な人がいるわ。学生だけじゃない。社会人やお年寄り、逆に幼稚園児だっている。その人達に合わせるために、様々な衣装が必要となってくるの。あらゆる状況に適切な衣装が必要だったのよ」

……なるほど、朱夏にはコスプレをする理由があったのか……。感心してしまうな。

「そっか……。お前も苦労してんだな。この衣装も全部そういう理由だったのか……」

自分の使命を全うするために、これら全部用意したというわけか……。

なんて責任感のある奴なんだ！！

「でもね」

「でも？」

「ここにあるのは全部、ただの趣味よ！！」

「……………」

感心して損しました！！

「ちなみに」

「ちなみに！？」

「私、”性格コスプレ”もしているの」

「”性格コスプレ”！？」

さつきからオウム返し of 連続だ。仕方ないよね。だって驚きの連続なんだから。

「その名の通り、主人公の状況によって性格を変えるの。普段もしてるのよ？」

「……………もしかして今は委員長な性格……………？」

「よく分かったわね！ その通りよ！！」

……………これが本当に委員長の性格なのか？ 委員長って担任を突き飛ばしたりしないものだと思うけど……………。

「主人公は千差万別。主人公にある程度好まれる性格を研究して、演じているのよ。もちろん、かなり細かく設定するのよ？」

「演じる、か……………」

朱夏は笑いながら言うけどさ。それってかなりストレスが溜まることだよな。

学校でも性格を演じているんだろ？　だとしたら、こいつはどこで素の自分を出しているんだろう……？

そう考えると、朱夏って想像以上に大変な仕事をしているのか。

……なら俺も主人公に戻る少しの間くらい、お手伝いしてみますか！　少しでも朱夏の負担が減ればいいんだけどね。

「では！　実際に演じて見せましょう！！」

……あれ？　意外に楽しんでる？

「それでね、それでね　わたちがいいんちよけんげんちかってね  
ふたりゆをくつつけりゆの　」

「……………」

あの後すぐ、朱夏は着替えのために俺を部屋から追い出し、しばらくするとまた部屋に招き入れた。

朱夏曰く『これから脇役を演じるのならば、私の演じる姿を参考にするといい』とのこと。

その結果がこれだ。部屋に戻るとすでにこの状態だったのだ。

「ふたりにおんなじしやぎょうをしゃしえてね　ふたりのじかんをふやちゆの　」

「……………」

「ねー、ねー、こつたあ、きいてるの？」

「ガアアアアアアアツ！！ ウゼエエエエエエエエエ！！」

我慢の限界だ！！ なんだ！？ この生物は！？

「どこで使っただよ！ そんな脇役！？」

「対ロリコン主人公用の脇役」

「……………」

ロリコンは犯罪だぞ！ そして自らロリを演じるのはもっと犯罪的だ！！

…………… 不覚にも少し可愛いと思ってしまったのは秘密だ！

「朱夏、もう分かったから止めてくれ！ 脳が壊れる……………」

「この程度でだらないわね。だからホッチキスにも逃げられるのよ！」

「その恋人から逃げられたみたい言い回し止めてもらえます！？

ホッチキスとどんな関係に見えたんだよ！？」

「とにかく公太。さっきから何度も言っているけどさ、私が委員長権限を使って二人を近づけて、学園祭の作業を同じにするから。公太はそのサポートをしなさいよね」

…………… ああ、さっき言っていたのはそういうことだったのか。全く聞き取れなかったよ。

「それで公太。あなたにも宿題を出す」

「宿題？」

「そ、…………… えーと、この辺りにあったはず……………」

まるで映画のドラえもんがポケットから道具を探するときのように、机から道具をポイポイ投げる朱夏。

「…………… ないなあ……………。あ、これ！！ なんだ、ヤカンか」

「整理しろよ……………。てか何でヤカンとか出てくるんだ！？ 原作再

現しすぎでしょ!？」

「あつたあつた! これこれ!」

朱夏が嬉々として取り出したもの。それは

「こ、これは……いわゆるギャルゲーというやつか……?」

「そ、ギャルゲー。ギャルゲーには色んな脇役が出てくるからね。それを参考にしなさい。そこにある4本全部」

……同じような顔に、凄まじい髪の色だ……。てかこの髪形、一体どうなつてんだ!？」

初めて見るギャルゲーのパッケージに思わず目を見張る。……  
というかこれって男用のゲームなんじゃないの?

「女の子がギャルゲーなんてするなよ!」

俺は思わず叫んでしまった。この事がのちに後悔することになる

「なんだって?」(ブチン!) 朱夏が小さく呟いた声

何故なら 朱夏の核地雷を思いつきり踏んでしまったからだ!

朱夏はギャルゲーのパッケージを、まるで印籠のように掲げて、  
高らかと叫んだ!

「女の子がギャルゲーやって、何が悪い!」

キッと睨まれる。……怖すぎるぞ!?! 身の危険さえ感じる!!  
俺はその圧倒的な迫力に全身が震え、言葉を失い呆然とせざるを



得なかった！

「……わ、悪かったって！！ 朱夏、そんなに怒るなよ！ 本当に悪かった！！ 許してくれ！！」

「ふん！！ 分かればいいのよ！！」

そこには怒り心頭でふんぞり返る朱夏と

とっさに土下座をしている俺がいた。

土下座は俺が身に着けた最強の護身術だ！

プライドはないのかって？      当然、ない。

「なあ、そろそろ許してくれよ……。女の子だってギャルゲーくらいしたいよな！ そうとも！ 俺が間違っていた！」

「うるさい、”元”リア充……」

「”元”を強調するな！」

こんなやり取りを続けるうち、朱夏の頭に上った血もだいぶ引いてきたみたい。

……今度は逆に冷たい言葉で突き刺してくる。

「……そうね。もう許してあげる。だって公太はこれから一生、リア充にはなれないんだもんね」

「うわーーーーー！ それを言うなあーーーーー！！」

「一生童貞で死になさい」  
「ぎゃーーーーー!!」

この女、絶対DSだ!!

……いや、もしかして性格をコスプレしているのかも知れないから、実際はどうなのだろうか？

でも現実に目の前にいる朱夏はただのDSだ!! ……鞭とか蠟燭とか出してこないよね……？

「でも大丈夫よ、公太！ 三次元がダメでも二次元があるわ！ ほら、彼女たちは裏切らないわよ!!」

「嫌ー!! 聞きたくないーーーー!!」

「ほら、この四本全部貸してあげるから!」

「絶対に要らん!!」

「後悔するわよ?」

うつ……。確かに興味がないことはないんだけど。でもダメなんだ!  
だ!

俺は知っている! そいつに手を出して廃人になってしまった隣の家のお兄さんを!!

「い、今はそんなことしている場合じゃないだろ!？」

「それがしている場合なの。さっき言ったでしょ? 公太は脇役に慣れてないって。だからゲームから何かしら学ぶことが必要なの!」

「うつ……。でも体から拒否反応が……」

嫌だ! 俺は絶対に隣の兄さんみたいにはなりたくない!!

「そんなに嫌ならもういいわ」

嫌がる俺の姿を見て、朱夏も興が削がれたみたいだ。薦めるのを諦めた。

助かった……俺は廃人になるつもりなんてない！！  
俺はホッと胸を撫で下ろす。

「じゃあ一生”ぼっち”ね。まあせいぜい長生きしてね」

やっぱりこう言われるのね！ それは嫌だ！！ でも廃人になるのも絶対に嫌だ！！

「孤独死か……。最近が増えてるみたいだし、別にいいか」  
「ぎゃうつー！！」

くそ、ちくちくと心を攻めてきやがる……！！  
……だがギャルゲーだけは絶対に……！！

「童貞のままお陀仏ね」

「ぎゃあああああぁっ！！！！！！」

「まあ私にはどうでもいいことなんだけどさ」

「うわーっ！ やります！ やらせてください！ 貸してください  
！ いやむしろ売ってくださいー！！ 童貞で死ぬのだけは嫌だ  
！！」

「風俗にでも行けばいいんじゃない？」

「それだけは絶対にしないと決めているんです……！！ お願いで  
すから、朱夏様……！！」

俺が泣きながら懇願すると、朱夏は積まれたギャルゲーに向かつてびしっと指刺した。

「そ。そこまで言われたら仕方ないわね。貸してあげるわ？ じゃ

あそこにある四本を明後日までに全部クリアしてきなさい」

「明後日まで！？ 無茶言っとなー！！」

この四本を全部だと！？ 無理だろ！？ 俺、ギャルゲーなんてやったことないのに！！

「学校にも来なくていいから。当然外出も禁止。学校には私から連絡しておくわ」

「そこまでするのかよ！？」

「当然でしょう？ それとも公太。あなた一生童貞でいいの？」

「やってまいります！！ 全ルートクリアしてきます！！」

「もちろんCGもフルコンプよ！ 後、攻略サイトは見ずにやるのよ？」

「鬼ー！？」

「巫女です」

「そうでした」

このくんだり、恒例になりつつあるのか？ あんまり面白くないんですけど。

「文句言わないの。時間も限られているのだし。明後日、ちゃんと脇役になりきれているかどうかテストするからね」

「テストだつてー！ーっ！？」

もし不合格なら……まさか一生童貞なのか！？ ヤバイ、絶対に合格せねば……！！

……それはそうと、明日、朱夏は一体何をするつもりなのだろうか。

「俺が休んでいる間、朱夏は何するの？」

「ちょっと準備があるの。委員長権限を最大限行使してね……。フフフフフ」

なんという黒い笑み！ やっぱり朱夏こえええええ！！

「とにかく、公太はそのゲームをクリアすること！ わかった!？」  
「……はい……」

やっぱりやるしかなさそうだな……。今日と明日でクリアできるのか？ これ。

「じゃあ携帯出して」  
「え？」

予想外の朱夏のセリフ。

「アドレス交換。当たり前でしょ？」  
「そ、そうだな……」

今後のことを考えると、朱夏と連絡しあうことは多いはずだ。アドレス交換するのは当たり前か……。でもなあ……。

女の子とのアドレス交換って、本来ならもつとドキドキするイベントだと思うんだよね。

そりゃ人気者の朱夏のアドレスがゲット出来たのだから本来は喜ぶところなんだけどなあ。

なんだかなあ……。期待出来ないと知っているから嬉しくも何ともないんだよね……。ドラに見せたら狂喜乱舞しそうなもんだけど。

「はい。登録終わり！ よし、さっさと出てけー!」

その後すぐ、俺はゲームを持たされて家から追い出されたのだっ

た。

## 脇役サブストーリー1 二次元へようこそ！

妹キヤラ『はやく、起きて。お兄ちゃん でないと キス、し  
ちやうよ……？』

「……………」

幼馴染キヤラ『いい加減起きなさい！ せつかくあんたの為に朝ご  
はん作ったのに……。冷めちやうわよ？』

「……………」

妹キヤラ『お兄ちゃん、早く学校行こう？ そうだ、たまには手を  
繋ごうよ！』

妹キヤラ『え？ 恥ずかしいって？ 何言ってるの？ 兄妹だよ？  
これくらい普通だよ！』

幼馴染キヤラ『ちよつと、私とも繋ぎなさいよ！ ……それとも何  
？ 妹とは良くて私とはダメ、なの……？』

「……………」

「うわああああああ、鳥肌が止まらない！！ 何だこの恥ずかし  
すぎるセリフはっ！？」

朱夏に渡された四本のギャルゲー。俺は最初的一本を起動し、プ

レイ時間およそ10分という序盤のうちに悶え苦しんでいた。

「はあ、はあ、あ、ありえんど、こんな設定！！……もしかして他の3本もこんなのばかりなのか……？」

キラキラした目でこちらを見上げるパッケージの美少女たち。

俺にはこのキラキラは眩しすぎる……！

「こんなの続けたら、俺は悶え死ぬ！ 確実に！！」

ゲームはさらに続く。場面はどの女の子に会いに行くかの選択肢に。

「えーと、どちらを選べばいいんだ？ ……そうだ、妹にしよう……」

……

妹キャラ『お兄ちゃん！ お弁当忘れてたよ！ そうだ、お昼一緒に食べようよ！』

妹キャラ『お兄ちゃん！ はい、あーん どう？ おいしい？』

妹キャラ『お兄ちゃん！ 今度は私にも、あーんして？』

「はい、あーん ……ちょっと待て！ 俺は今一体何を口走っていた！？」

やばいぞ！！ 洗脳が始まった！！

妹キャラ『えへへ、おいしい お兄ちゃん、もう一回！』

「もー、しょうがないなー、もう一回だけだぞ！」

………！？

「こ、これは……！ まさか！」

すでに洗脳が完了している………！？

うおおおおおおお！！ 目を覚ませ、俺！ 現実に戻ってくるんだ！ ……はっ！

俺はとっさに思い出した！ そう、隣の家のお兄さんを！



隣のお兄さん『うおおおおおっ!!』

そうだ！ 俺はいつか聞いたことがある！ この叫びを！  
あの時は何の叫びか分からなかった！ だが今なら分かる！ こ  
れだ！

「……つまり……！ これはまずい!!」

そうだ、あの夜。あの夜以降、お兄さんの姿は見なくなった！  
噂によると、あれ以降、ずっと部屋に引きこもってゲームに没頭  
しているらしい！

とすると……！ 俺も同じ状況になる可能性がある……！  
それだけは絶対に嫌だ!! 俺は現実に生きるんだ!!

「俺は絶対に負けない！ 俺は絶対に負けない！」  
強く念じなければ流される。間違いなく！ 心を強く持て、俺！

妹キヤラ『あ、お兄ちゃん。ほっぺたにご飯粒ついてるよ？ ……  
えいっ！ ぺろ』

「ぬお!?!?」

妹キヤラ『へへへ、ごめんね、お兄ちゃん……。つい、やっちゃっ  
た』

「そうかそうか、なら仕方ないなあデヘヘ。 ………………！  
？」

ま……まさか……俺は……すでに……洗脳されて……!?

「うわあああああああああ!?!?!?!」

「「じつにい、うるさいよ？ 何してんの?」

俺が悶絶している最中聞こえてきた、現実の声。

「ひ、聖!？」

俺にはひとり妹がいる。名前は聖<sup>ひつり</sup>。年齢は俺より二つ下の中三だ。

「入るよ？」

「ちょ、おまつ！」

待て！ 今部屋に入るな!! 見られては非常にまずいものか!!  
お願いだから少し待って！ せめてテレビの電源くらい……！

そんな願いも虚しく無慈悲に部屋の扉は開いた。

「何してんの？ こうにい。そろそろご飯だよ？」

「い、いやぁ……ちよつとゲームをね」

間に合った！ ぎりぎりテレビを消すことが出来た！ だが。

「新しいゲーム？ 私もやりたい！ ちよつと見せて！」

「待て、これはお前に出来るような簡単なゲームじゃない！ ……

あ！」

俺は言ってから後悔した。そうだ、こいつは……。

「へえ、それは面白そうだね……！ 私に出来ないようなゲームなんて興味あるよ！」

極度のゲーム好きだったんだ!! まるで獲物を見つけた肉食獣のように舌なめずりしながら迫ってきた!!

「とにかくゲーム画面見せてよ！ 私、アクションやRPG、シューティングやパズル、格ゲーでさえ得意なんだよ？」

そういえばこいつ、ゲーセンで廃人達をフルボッコにして泣かせた事もあったな……。あの時は笑えたけど。いや、そうじゃないくて！

「とにかくダメだ！ さ、先に飯食ってろよ」

「えー、ゲームゲーム……」

近づく聖を必死に抑えるが、予想以上にその力は強かった！

「こうにい！！ 少しでもいいから見せてよ！！」

「だめだ！！」

テレビの電源ボタンは俺の体でガード！ 後はゲームの電源ボタン！ これを押せば……！

「ほっ、ポチっとな」

ぷっん。

リモコンの存在を忘れてたー！！

「わくわく。どんなゲームかなあ！？」

ゲームはオート再生で進めていた。頼む……！ せめて当たり障りのない共通ルートくらいでいてくれ……！！

妹キャラ『お兄ちゃん、だーいすき』

という儚い願いすらも、粉々に打ち碎かれた。

「……………」

「……………」

妹キャラ『お兄ちゃん、一緒にお風呂はいろ 背中流してあげるね！』

しかもよりにもよって入浴シーンだって……！？

「……………」

「……………」

妹キャラ『お、お兄ちゃん、そんなところ、触らないでよ……。でもお兄ちゃんだからいいのかな……。？』

ちょ、おま！　いくらゲームだからって　何やってんだ！？　こんなもの聖に見せたら……。

俺は恐る恐る聖へと視線を向けると。

「……………こうにい？」

「……………なんでしょうか？」

聖はこちらへ至って普通の笑顔を向けてきた。ただ眉毛がピクピクしているのを除けば。

「最低」

「……………はい」

笑顔は突如反転し、腐った魚を見るような視線を突きつけてきた！

ドスドスと部屋から出て行く聖。最後にこちらを一瞥して。

「当分、声掛けないでね」

そう言い残して出て行った。

後にはオートで進むゲーム画面と俺だけが残された。

妹キャラ『また一緒に入ろうね！　お兄ちゃん』

「やかましいっ……!」

## 第四話 朱夏の激励

「ね、眠い……」

水曜日の朝6時。

重いまぶたを擦りながら、誰も居ない教室で一人呟く俺。

「なんだってこんな朝早くから……」

実は昨日の夜、シユカからメールが来たのだ。  
その内容とは

朱夏『明日、6時までには教室に来なさい』

というものだった。一体何をするつもりなんだ……。

「おはよう。ちゃんと来てるわね」

少し遅れて朱夏も登校してきた。なるほど。これが委員長モード  
ってわけね。

「当たり前だろう……」

朱夏から来たメール。実はあれには続きがある。

朱夏『来なかったら、一生童貞だから』

もはや脅迫メールじゃないか、これは……。

「それで、こんな朝っぱらから何をするつもりだ？」

「……………」

朱夏に問いかけるも、黙ったまま答えようとはしない。それどころか呆れ顔でこちらを見ている。

「どうした？ 朱夏」

「……………」

一体何なんだ？ 朱夏表情は依然として変わらない。

「おい、朱夏。いい加減に」

「せいやー!!」

「グフツ!!」

朱夏は唐突に拳を振り上げたかと思うと、その拳を躊躇いなく俺の腹にぶち込んでいた！

……最近こいつには殴られてばかりな気が……

「な、何故殴ったし!？」

「そこは脇役らしくリアクションしなさいよ!」

「……………へ?」

「へ? つじやないでしょ? 早くリアクションなさい!」

なんという無茶振りなんですか！？ 俺は芸人じゃないぞ！？  
……って、俺はそんなつまらない理由で殴られたのか？

「めちやくちゃ言つな！ 朝っぱらから変なこと言ってるじゃねーよ！」

「とにかく、貸したゲームの脇役っぽいことをしなさい！ 言つたでしょ？ テストするって！」

ああ、なるほど……。これはすでにテストってわけね。それを先に言えよ。

朱夏から借りたゲーム。その脇役っぽいことが……。

ああ、そういえば最初名前の読み方が分からないキャラがいたよな。確かあいつは……。

はるはら、だっけ？

「おはよう、朱夏。これから一体何をするんだ？                      それと便座カバブラアアアアアツ！！」

こ、今度は正拳突きですか……！？

ああ、もう慣れてきたよ……。この痛みが段々と快樂に変わっていくんだね……。

……って、そうなら終わりだぞ、俺。

「うーん。まあ合格ね」

「じゃあ何故殴ったし！？」

「そういうキャラだったでしょう？」

「……………」

た、確かに……。再現しすぎッス、朱夏さん……。



「どう？ 全部面白かったでしょ？」

「ま、まあな……」

代わりに大切なものを失ったけどな。未だに聖は口を利いてくれないし……。

「しつかりゲームをやり込んだみたいね。では早速作戦を開始しましょう」

ついに俺が脇役として動くときが来たようです。出来れば殴られる役はもう嫌だなあ……。

「今回の作戦名。それは」

（ゴクリ……）

「”同じ作業で親密度アップ作戦！” 略して”オナッブ”  
！！」

「……………」

「どう！？ ”オナッブ作戦”。いい名前でしょ！」

「ソ、ソウデスネ」（棒）

い、言えない……。ネーミングセンスが無さすぎるだなんて……。……というか色々和不味いだろ、その名前！！ 一歩間違えたらセクハラですよ！？

「でしょでしょ！？ これ、昨日これ考えるのに5時間も掛かったんだから！」

「ソレハタイヘンデシタネ」(棒)

そんなキラキラした目で見ると……。心が痛くなってくるだろう……？

「そしてこれがオナツプ作戦の為に作ったアイテムよ！」

教室の後ろに置いてあったダンボールを、高々と自慢げに掲げる朱夏。

「なんだそれ？」

「これはなんと……！」

「くじか？」

「……………！？ど、どうして分かったの！？」

いや、そんな驚く顔をされてもね。そりゃ分かるよ。箱の上に穴開いているし、何より

「思いっきり”くじ”って書いてあるぞ……？」

「あつ……………」

「……………」

「そう！これで学園祭の作業の班分けを行うのよ！」

…………… あー、はいはい。今回もこのやり取りを無かったことにするわけね。だいぶお前の性格が分かってきたよ。さすがに演技じゃないでしょ？

「今日のHRでみんなに引いてもらうの。このくじの中身は委員長である私が作るようになってね」

作ることになつて”、ではなく”した”のだらうなあ。

「なんと！ このくじ箱に細工を施したの！」

朱夏が箱の中を指差す。中には無数の数字が書かれた紙がビニール袋に入っていた。

くじに書いてある数字は、おそらく班分けの数字。穴もひとつしかないし。

一見して、どこもおかしなところはない。

「これが細工？ 普通に見えるが……」

「そう思わせなければ細工にならないでしょ」

「その通りですね」

「よく見て。このビニール袋。実は二枚重ねになっているのよ」

「ほほう。それでそれで？」

「ターゲット以外の人がかくじを引くときは、そのまま上の袋のくじを引かせる」

「ターゲットには下の袋。下の袋には7の数字しか入ってないの。私達とホッチキス、みっちーの時だけ下の袋を開ける」

「だから私達はどうやっても同じ班になれるってわけ」

「なるほどな。昨日の準備ってのはこれのことだったのか」

朱夏もやることがえげつねえぜ！ そういうの嫌いじゃないわ！

これで確実に同じ班になれるな……。

……しかしこれ、どこかで見たトリックだな……。確かテレビドラマで。

見ると、朱夏は何冊かの本を抱きしめていた。

「あ、あれは！      なぜ ス！？」

必死に隠しているが丸見えだ！ 俺もあの本を見たことがあるぞ！  
ブック フで！

よく見れば朱夏の本、ツクオフの値段シールが付いてるじゃないか！ 好きななら新品で買えよ！

「次郎最高……！」

知らんわ！ つとツツコミを入れてやりたい。

……そんなことしたら確実に殴られるからしないけどね。

「とにかく、準備したのはこれだけなのか？」

妄想に浸りきっている朱夏をこちらに戻さないかね。

「そうね。後はターゲットの情報を集めたわ」

……思っただけどこいつ、一体どうやって情報を集めてるのだろうか……。

「今回の主人公、ホッチキスは、今までほとんど女の子と話したことがないくらい内気な性格。だから今回は非常に難しいミッションになるわ」

そうだろうね。俺だって一昨日の会話が歴代最長だよ。

「だけど、ホッチキスには一つ、趣味があるの。それは電子工作」

「電子工作？ なにそれ？」

「電子部品を使って工作することよ。発光ダイオードとかトランジスタとかを組み合わせるね」

「……………それっておもしろいのか？」

ダイオード？ トランなんか？ 英語はわからん。

「好きな人は好きなのよ。でね、今回はそれを利用することにした

わ  
」

「どうやって利用するんだよ？ まさか俺にも電子工作しろってんじゃないだろうな？」

「まあそれもあるけどね。メインは電子工作を学園祭で使おうと思  
って」

「使えるのか？」

「電飾よ。占いの館の電飾。雰囲気を作り出すためには照明を工夫  
しないといけないけど、それを電子制御してもらおうと思って」

「自動で出来るから当日の人員も節約できるし、悪くないでしょ？」

「へー、そんなことが出来るのか」

「それにそういう大道具係って、当日あまり目立たないしホッチキ  
スにはびつたりだと思う。私達の班は大道具に決定。だから、はい  
」

「なんだ？ …… って、おも！」

朱夏はどこからともなく数冊の分厚い本を取り出し、ドンと俺の  
机の上に置いた。

「『サルにも出来る電子工作』……？」

……これはあの有名な『サルでき』シリーズの本ではないか！  
色々な作品に出てくる伝説のシリーズだ！！

「それで、やっぱり俺もやるわけね……」

「大道具係になるんだから当たり前でしょ！ これで少しは勉強し  
なさい！」

「それに電子工作という共通の話題が出来たら、あなただって話し  
やすいでしょ？」

大道具なんて地味な仕事、初めてだよ……。でもまあ確かに、今  
の俺にはホッチキスとの共通の話題がない。

ならこれで少しは話題が出来るかも。

「わかったよ。これで少しは勉強しておく」

「よろしい。そうそう、その本、図書室で借りたんだけど、返却期限は学園祭の次の日だから。公太から返しておいてね」

「……………」

ま、まあ朱夏がわざわざ借りてきてくれたんだ。そのくらいはね。それに俺は主人公に戻るためなら何だってすると決めたんだ。この本の内容を理解することくらい容易いことさ！

と、意気込んでページをめくり

そして閉じた。

「…………無理だ…………わけわからん…………」

沈む俺を他所に、朱夏の情報公開は続く。そして一番気になる情報が来た。巡崎さんのことだ！

「次にみっちーのこと。あんたはよく知っているでしょ？ だから軽く説明するわ」

「ふぐ！」

俺の心が悲鳴を上げる！ 傷口をナイフで抉られるような、そんな痛みを感じる！ ……実際にされたことはないけど。

「彼女はおっとりとしていて、優しく人当たりもいい。誰からも慕われ、先生方からの信頼も厚い」

そうなんだよ。巡崎さん、誰にでも優しいし、おっとりして  
て見ていて和むんだよなあ……。

「部活は美術部で、昨年の清桜展で、銀賞を受賞。テレビでインタ  
ビューも受けてるわ。……チートレベルな子ね……」

清桜展と言うのは、俺たちが住んでいるこの主宮を中心とする地  
域、清桜市が主催する絵画コンクールのことだ。

プロアマ問わず、毎年二千以上の作品が応募されている、国内で  
も屈指の絵画コンクールなのだ。このコンクールを足がかりにプロ  
に転向する画家だって少なからずいるほどである。

巡崎さんって、やっぱり天才なんだな……。

「ちなみにスリーサイズは上から」

なぬ！？　そこまで調べてるのか！？　恐るべし朱夏！  
さあ、早く続きを！

「　なんてさすがに調べてはいないけど」

ですよねー！！

「彼女の好きなタイプは　……ププツ！！」  
「そこ笑うところ！？」

男として一番気になるところだぞ！？

「だってさ、好きなタイプって。ずばり公太みたいな人だって」

俺の中で何かが崩れ落ちた。

「いやー、あなた達って本当にお似合いなカップルだったのよね。」  
少しでも主人公時間があればね。」

「はうっつー!!」

やっぱりそうだったのか! どうしよう、涙が止まらない……!!  
あの告白のときはまだ、彼女は俺のことが好きだったんだ……!  
それなのに! 俺に主人公時間が残ってなかったばかりに!  
なんたる不幸だ!

「ほらほら公太、よしよし、良い子だから泣き止みなさい」

朱夏はポケットティッシュを取り出し、俺の鼻にティッシュをあててくれる。

「ほら、チーンなさい」

「チーン」

何故だろう、今はやけに朱夏が優しい……。

「……」優しい姉の役” っつても意外に悪くないわね……!!」

「……っつて、おい!？」

ここで性格コスプレを試してたんですか!？ 性格”悪魔”の間  
違いだろ!!

「でも公太。これだけは覚えておいて」

…… 朱夏って唐突に真剣な顔になることがあるよなあ。そういう  
ときは大抵大切なことを言うんだ。



「公太がこれから行う脇役は、この程度で泣いていられるほど簡単なことじゃない」

「自分が本気で惚れた人を、他の誰かとくつつけるの。それは多分、想像を絶するほどの心の痛みを伴う。」

「あなた達が過去、互いにどう思っていたようにと一切関係ない。あなたはもう主人公じゃない。彼女とは二度と恋愛できない」

「理解しなさい。これは公太がもう一度主人公になるための代価。こんなに大きな代価を支払うんだもの。失敗は許されない。だから」

「本気でやりなさい。公太　　！！」

朱夏の鋭い言葉。だがその言葉は、想像以上に優しいものだった。俺を氣遣う暖かさを、言葉の中に感じる事が出来た。

それを聞いて尚、落ち込んでいるほど、俺は弱くない。……はず！

「朱夏の言うとおりだな……。俺はこれから二人の脇役にならないといけないんだよな。ならこの程度で泣いてなんかいられないな」

「そうよ。辛いでしょうけど、主人公に戻るために頑張きなさい」  
「そうだな。俺はまた主人公にならないといけないんだ！」

涙を拭って決心する！

「ありがとうな、朱夏！ おかげで元気が出たぜ！ 今ならどんな役だろうと演じきれ自信があるぜ！」

「その意気よ！」

朱夏の激励は、俺の心を燃え上がらせた！！ やってやるぜ！  
目指せ、助演男優賞！！ うおおおお！！ 燃えるぜ！！

「……………」後輩を励ます先輩の役” っても、結構ありね…………フ  
フ……………」

俺の心は今、灰になった。

## 第五話 脇役としての自覚

朝の8時。教室には次々と生徒が登校してきた。

その中にはホツチキスや巡崎さんの姿も。

今日からあの二人をくつつける、か。

これから行う作戦のことを考えると、妙な高揚感が沸いてくる。

「おはよう、公太」

「あ、ああ。おはよう、優」

始業時間ぎりぎりに登校してきた優。

……そういえばドラの姿はないな……。

「ドラは？」

「さあ。いつも通り遅刻だろ？ それよりも公太」

ぐつと顔を近づけられる。息が当たる程の距離。なんだ？ 恥ずかしいじゃないか。

「ど、どうしたんだ？ 優」

「公太、今日はやけにそわそわしてないか？」

目線を合わせて僅か二秒。たったこれだけで優は何かを感じ取ったみたい。なんて鋭い奴……。

「公太、何か企んでいるのか？」

「ちょ、一体何の話ですか？ ボクは普段どおりですとも！ 何も企んではおりませんことよ？」

「とぼけたって無駄だよ？ 公太って焦ったり嘘つくときって一人称が”ボク”になるだろ？」

「それに昨日の欠席。僕の記憶違いじゃなければ公太は皆勤賞を目指していただろう？ それなのに休むのは怪しい」

鋭すぎる！！ …… というか俺にそんな癖があったのか！ 知らなかった……。

さすが幼稚園から一緒に過ごした仲だぜ！

だがここで優に悟られるわけにはいかないのだ！ 何せくじの細工はみんなには内緒なんだからな！ とぼけるしかない！

「そんなことないって。考えすぎだろ？」

「……本当にそうかな？」

うう、こいつ本当に恐ろしい！ 誰か助けて！

「おはよう、お二人さん！ 公太、昨日は一体どうしちゃったんだよ？ 寂しかったぞ！」

この筋肉質の腕はドラか！

「えーい、苦しい、放せ！ ドラ！！！」

などと言いつつ、心の中では遅れて現れたメシアに感謝していた！

よくぞこのタイミングで来てくれた！ 助かったぜ！

「体は大丈夫なのか？ 委員長の話だとインンになっちまったそうじゃねーか！」

「……ンキン！？」

朱夏の奴、適当にも程があるぞ!？」

「あれ、相当辛いらしいな……。みんなが噂してたぜ……。ところでインキ ってなんだ？」

皆が噂を!？ ということは、すでに学校中に広まっているってことか!？」

「……朱夏め……適当なことを……!!」

俺は朱夏を睨む。よくも適当なことを、と!

「……………GJ!」

だが、何をどう間違えたのかは知らんが、朱夏には俺が感謝していると勘違いしてたらしい。まさかのサムズアップ。

よく耳を澄ませば、あちらこちらからヒソヒソ、クスクスと噂する声が!!

女子(テニス部)「里美君って、あれなんだね」

女子(ラクロス部)「ちよつとイメージダウンかな。和久井君のだったら私が舐めて治してあげたい……」

女子(相撲部)「ちよべりば」(死語)

男子(サッカー部)「あゝ、残念!!」

男子(野球部)「アウトー!!」

男子オタ「疑わしきは爆する! 公太氏オワタwwwwww」

「うわあああああああああああ!!! 朱夏の奴、適当なこ  
と言いすぎだろおおおお!!!!!!!!」

「……さすがにあれは嘘だと思ったけど。噂が広まるのは早いね」

「みんな、違うんだ！ あれは嘘だ！ 信じるな！ 昨日のはただの風邪だよ！ 全部委員長の嘘だ！」

男子（サッカー部）「なんだ、嘘なのか……つまんね……」

男子オタ「でも委員長の嘘なら許せる！ 可愛い正義！」

女子（ラクロス部）「でも里美君が言うことが正しいってわけじゃないし」

女子（テニス部）「むしろ恥ずかしいって理由で嘘を言ってるだけなんじゃない？」

ま、まずい……。俺の言う方が嘘で、やっぱりイキンという結論に達しつつあるぞ！？ 一体どうすれば……。

そのときだった！

「みんな。聞いてくれ！」

「優！？」

急に立ち上がった優が皆に向けて演説を始めた！

「実は一昨日の放課後、僕の妹が足を滑らせて川に落ちたんだ！」

「え？ お前に妹なんていたか！？」

「……少し黙つてろ……」

ぐええ……。お前も俺の腹を殴るのかよ……。

「そのとき、妹を助けてくれたのは公太なんだ。川に飛び込んで命懸けで助けてくれた。それが原因で妹は風邪を引いたんだけど、公太はその看病までしてくれたんだ！」

ああ、全部嘘の話ね。俺はそのとき家でギャルゲーしてました。

……妹に嫌われていました。

「そのおかげで妹は元気になったよ。でもその風邪が今度は公太に移ってしまつて……。昨日の休みはそれが理由なんだよ」

よよよ、と涙を浮かべる優。なんてすごい演技。朱夏よりも巧いんじゃないか？

「だから妹の恩人である公太の変な噂なんて流さないで欲しいんだ……」

優が語り終え、しばらくの沈黙。そして

男子（サッカー部）「里美、お前ってなんていい奴なんだー！！」

男子（野球部）「カンドッス！！」（感動です！）

男子「俺達に出来ないことを平然とやってのける！そこに痺れる憧れるうー！！」

女子（テニス部）「里美君、見直しちゃった！本当にかっこいいよー！」

女子（ラクロス部）「みんなに訴える優君かつこよかった……。ま、まあ里美も和久井君の次くらいにはやるじゃん？」

女子（相撲部）「やべー、あちし感動涙で化粧ブレイクなんだけどー」

噂は大歓声に変わった！

男子一同「里美、お前は今、最高に輝いてるぜー！！」

「……………優の力つてすげえ……………」

さっきまでの噂は吹っ飛び、俺は英雄扱いに！？ 恐るべし優の人心掌握力！ 本日2人目の救世主だ！

「良かったね、公太。噂は吹き飛んだよ？」

「さすが優！ ありがとう！ 持つべきはやはり親友だな」

「なあ、公太。インキンって何だ？」

おい、ドラ！ どこかに をつける！

「さて、公太。これで貸しを一つ作ったわけだ。何を隠しているか教えてもらうか」

「なぬ！？ 今のは親友を思って故の行動ではないのか！？」

「無論そうだけど。でも親友に隠し立てするのも良くないんじゃない？」

ああ……、やっぱり優には勝てそうに無い……。誰か助けて……。

「おい、席に着けよ」

ウルモフが教室に入ってきた！ 本日3人目の救世主！

「さ、早く席に着けよ、優。ウルモフに怒られるぜ？」

「怪しいね……」

優は渋々と自分の席に戻っていった。そのときの視線は俺と、そして何故か朱夏に向けられていた。

朝のHR。ウルモフの適当な連絡事項が済み、いよいよ朱夏が例のくじを持って壇上へ上がった。



「今日から学園祭の準備のために班分けを行います！ 班分けは“公平”にくじで！」

「学園祭が終わるまで、このくじで決まった班で行動してもらいますので！ では出席番号順に引きに来いやー！！」

そろそろ番号の早い者から順にくじを引き始める。ちなみに出席番号はあいいうえお順だ。

俺達は細工によってなるべきは7班。我がクラスは全員で34人であるため、各班を5人すると、丁度4人班がひとつ出来る。それが7班なのだ。

”え”の朱夏がくじを引き、無事に7班になり、次にホッチキスの引く番が来た。

「さあ、引いて」

朱夏はそう言いながら手元を僅かに動かして下の袋に通じる入り口を作った。

そうとは知らずくじを引くホッチキス。結果はもちろん7班になった！ よし、成功だ！ 次は俺の番！

「朱夏、俺にも引かせてくれ！」

「うるさいわね。さっさと引きなさい」

と言いつつ目配せし、俺も無事7班に！

「うまくいったな……！！」

「ええ……！！」

「後は巡崎さんだけだ。しくじるなよ……？」

「当然……！！」

フフフフと互いに笑みを浮かべる俺達。

そんな俺達に背後から視線を送る男がいた。

席に戻ると優がやってくる。

「公太、何班だった？」

「俺か？ これ。7班だよ！」

ピラピラと7と書かれた紙を見せ付ける。

残念だなあ。今回は優君と同じ班になることは絶対にないんだよ。  
少し寂しいですなあ！！

優を出し抜けた気がして笑いが止まらない！

「ふーん。7班ね」

優は素直に席に戻った。あいつは”わ”だから最後に引くんだよね。だから間違っても7を引く事故はない！

くじ引きへ視線を戻すと、朱夏が俺にアイコンタクト。どうやら巡崎さんにも7班のくじを引かせたらしい。

俺達はミッショコンプリートしたのだ！ 俺達はまたしても笑いを堪えたのだった！

だが俺は一つ、大きな勘違いをしていたのだ。

優が引き下がったという、壮大な勘違いを！

くじ引きも終盤に差し掛かり、そして最後の優がくじを引く番になる。

……フッフ、すまん、優よ。確かにお前の言う通り隠し事はあった！

だが、今回はお前に気づかれるわけにはいかんだ！ 何せこのくじ引きには俺の人生が掛かっているのだからな！！  
優がくじを引いてこちらに戻ってくる。

「優、何班になったんだ？ もしかして俺と同じ班か？」

もちろんそんなわけではない！ あるわけがない！ でもついつい尋ねたくなっちゃう！

別に勝負をしているわけじゃないのに、勝ち誇った顔を浮かべる俺。

「 僕の班か？ 公太と同じ 7班だよ 」

「そうかそうか。いやあ、実に残念だ。あつしは是非とも優君と同じ班になりたかった……………って、ええ……………?!？」

そんな馬鹿な……………?!？

振り返ると、朱夏も俺と同じ反応をしていた。一体どういうことだ！？

「え、えっと、優君？ 君のくじ、見せてもらえるかな？」

「くじ？ はい、これ」

優は余裕しゃくしゃくといった表情で、動揺する俺にくじを見せつけた。

「マジだ……。本当に”7”と書いてあるぞ……………」

そのくじには間違いなく7と記述されていた!!

俺と朱夏が啞然とする中、班が決まったということでHRは終了したのだった。

HR終了後、俺達は優に呼び出されていた。

「さて、説明してもらえるかな？」

「い、一体、な、なんのことかね!？」

落ち着け俺! 動揺するな……、動揺するな……。そうだ、人という字を手にも3回書いて飲み込めば!

「公太、それは緊張をほぐすやり方だよ」

思考がばれてる!？

「公太、委員長。みんなに公表してもいいんだよ? あの箱の仕組みと二人が意図的に班員を操作していたこと」

全部ばれてるー!?!?

「そしたら君達はクラスの皆から叩かれるだろうね? 特に委員長。クラスの公平を保たねばならない立場の君が、そんなことをしていたとしたら非難殺到だろう? それはそれで面白そうだけど?」

「やばい……。優の顔、本気だ。こいつ頭は良いし、表向きはすごい良い人っぽいけど、実は相当な腹黒なんだ!」

何事も自分さえ楽しければそれでいいという、典型的な狂人なんだ……！

「だから？ 私は別にそうなくてもいいけど？」

朱夏も負けずに反論！？

そういえばこいつも狂人の1人だった！ しかも痛さではこちらの方が上だ！！

「さすがは委員長。強いねえ。でも、公太はそうはいかないだろう？」

ターゲットは俺！？ おいおい、無二の親友の俺を蹴るつもりか！？ ……こいつならやりかねん……。

対象が俺になったことで朱夏表情が歪む。

「く、何が望み……？」

会話が犯罪者くさいぞ！？ この二人！！

「望みは特に無いんだけどね。僕はただ、何故こんなことをしたのか聞きたいだけだよ。二人が朝、こそこそやってるのを見かけてね」「何故いたんだよ！？ 朝6時だぞ！？」

「今日は学校に泊まっていたからさ。どうも家に帰る気がしなくてね」

実は優の家には複雑な事情があったりする。

そのせいかあまり家には帰らず、保健室に泊まったり、うちやドラんちに泊まったりすることが多い。

「それに朝の公太の様子が普通じゃなかったからね。すぐに何かあるってわかったし。それにホッチキスや巡崎も関係あるんだろ？」

「そこまで分かるのか!？」

「同じ7班になったんだ。何かあるのは确实だ。それに昨日委員長が聞き込みして回ってたのもこの二人のことだし」

それだけの情報でそこまで見抜いたのかよ！ こいつマジで何者なんだ!？

「……………負けたわ。まさかそれまで見抜かれてたとは恐れ入ったわ。そうよ。あなたの言う通り7班は意図的に作った。理由は……今全て話せるほど時間がないわね。昼休みにしましょう」  
「じゃあ昼休みにじっくりと聞くと聞くよ」

二人の会話が終わり、席へ戻ろうとする。…………あれ？  
俺、ほとんど会話に参加してねーぞ!？

「待て待て優、お前に聞きたいことがあるんだって！」  
「なに?」

「くじだよ、くじ! どうしてお前も7班なっているんだ!？ 7班のくじは4枚しかなかったはずだぞ!？」

事前に朱夏と確認したんだ。間違いない。

だが優と朱夏は「今更何聞いてんだ? こいつ」みたいな目で俺を見た。なんで!？

「そつか。公太には分からなかったのか」  
「まあ公太だしねえ…………」

ボク、すげーバカにされてます!？

「公太はバカだからね。無理もないわよ。何せ公太はバカだからね」  
「バカだからねえ……」

「バカバカ言いすぎでしょう!？」

……ぬぬ？ この二人、早速意気投合してらっしゃいます？ さつきと立場が全然違うぞ!？

というか朱夏さんはボクの味方じゃないの!？

「公太、あれはね。僕が7班のくじを一枚偽造したんだよ」

「……偽造？」

「そう。公太が何班になったかを訊いてからね。僕はくじを引くとき、偽造したくじを握って箱に入れ、そのまま出した」

「他の人から見たら普通にくじを引いているように見えるだろ？」

「おお！ なるへそ！」

さすがは優。まさかこちらのトリックを見破った上で、自らもトリックを仕掛けてくるとは……。

「私も最初は驚いたけどね。箱の中を見たらすぐに分かったわ。くじが一枚余っていたんだもの」

「まともに調べられたらすぐにばれるけどね。でもそれをしてら困るのは君らだろう？ だから成功したのさ」

ニヤリと唇を吊り上げる優。こええええええええ!!

俺は心底、優を敵に回さないようにしようと誓ったのだった。

昼休み。

昼食を早々に済ませた俺達は、屋上にて優に事情を説明していた。

「ということなんだ。信じられるか？」

普通ならこんなこと信じられないだろう？

俺だって当事者でなければ信じられなかっただろうし。

「なるほどね。道理で僕が協力したのにも関わらず振られたわけか。  
うん。納得」

「信じるの早すぎない！？　ここは疑うところでしょ！？！？」

ボク、この先優君が詐欺の被害者にならないか心配になってきました。  
しましたよ！？

「正直どっちだっていいんだ。面白ければね」

……この先詐欺の加害者にならないか心配になってきましたですよ……。

「それで、これから僕はどうすればいいんだ？」

「そうね。ひとまず周りには黙っておいて。それと、もしよければ  
手伝ってくれないかしら？」

「いいよ。暇だし。具体的には？」

「二手に分かれて行動しましょう。私と公太はホッチキスへの接触、  
優にはみっちーへの接触をお願いするわ」

「さらに具体的な内容は放課後集まってから伝えるから」



「了解。じゃあ僕はこの辺で。また後でね、公太」

そう言つと優は手を振り、颯爽と屋上から降りていった。

「全部ばれちゃったな……」

「いや、これはある意味ラッキーよ。優は色々と頭が回るし、何より公太のことを気遣っている。公太が不利益を被るようなことは絶対にしないわ」

「あのエリートが？ 俺を気遣っている？ はははは、それはないつて！」

なーに言つてんですか。それはあり得ないつて！  
普段から俺はあいつに振り回されまくつてんだぞ？

「……………」

……………ん？ 朱夏の視線が冷ややかなんだけど？

「……………さすがずっと主人公だっただけあるわね。親友の厚意にすら鈍くなつてる」

「鈍い、だって……？」

「鈍い。ギャルゲーの主人公以上に鈍い！！」

「そ、そんな……。そんなに鈍いのか……？」

自分では良く分からない。でもそのことで朱夏が憤っていたのは分かった。

「やっぱり、俺鈍いのか？」

「当たり前でしょ！？ 鈍すぎるわー！！」

「あの優が他人の為に働く、それも無償で、なんてあり得ない事な

のよ!？」

「クラスの子が体育で怪我をしたとき、それを気遣うどころか平然と踏みつけてくるような奴なのよ!？」

「誰かの為に働くなんて、それこそ公太やドラくらいなものよ!！」

確かに優は自分以外には無関心だし、クラスでも浮くこともある。だがそれは優自信が望んでいることだと思っていた。

「公太は他人からの厚意に鈍感すぎる! もし主人公の厚意に気づけなかったら、それこそ全て終わりなのよ! そんなんじゃないから先やっていけないわよ!」

鈍感。確かにそうなのかも知れない。

考えてみれば俺と優は何かことが起きる度に一緒にいた気がする。俺の手に負えないことがあれば、真っ先に優に相談した。優はどんなことも嫌な顔一つせず解決してくれた。

そのおかげか、俺は一度たりとも嫌な思いをした記憶は無い。

これってつまり……優からの厚意を、俺は無視していたってことなのか。

「そうか……。俺、主人公に慣れ過ぎていたんだな……」

朱夏に言われた初めて気づいた。そして親友からの厚意を感じ取れなかった自分が酷く情けなかった。

「これから慣れていけばいいのよ、公太」

こういうとき、朱夏は必ず優しい言葉を掛けてくれる。それが性格コスプレであっても、嬉しかった。

「そうだな。これから頑張って慣れていくさ！」

脇役になるということは、様々な人の厚意に気づき、繋がりを作っていくこと。

そして主人公を全力でサポートすることだ。  
クヨクヨしている暇は無い！

「そうよ、その意気よ！　これからは一生脇役かも知れないのだし  
」！

「それを言うな！！」

いつものやり取りだったが、今回に限っては、落ち込む俺を  
励まそうとしてくれた朱夏の厚意を感じられた気がした。

脇役としての自覚を、少しでも得たのかも知れない。

## 第六話 作戦開始！！

「これから大道具担当となった7班の会議を行っわー！！」

放課後、我らが7班メンバーは朱夏の号令で技術室へ召集されていた。

技術室には様々な工具が常備されていて、学園祭準備期間中は誰もが使用できるようになっている。

早速会議を始めて 始めていたのだが。

「いい！？ うちは大道具なのよ！？ 出し物の中で一番大切な仕事なのよ！！ 分かってるの！？」

と、やけにテンションの高い朱夏が一人で騒ぎ。

「……………」 (チラッ)

「……………」 (汗)

俺と巡崎さんは互いに意識しすぎていた。

巡崎さんは目線が合う度に顔を赤く染めて俯き。

俺はその度に自分の境遇を恨んだ。なんとも気まずい雰囲気。

……振られた今見ても、本当に可愛い……。ちくしょー！！

「公太、泣くなら僕の胸で泣きなよ。少しは気分が晴れるかもしれないよ？」

優が両手を広げる。俺はもちろんお言葉に甘えた！

「うわー！ーん！！ やっぱり諦められないよー！ー！！」

「よしよし。元気出して！ 大丈夫、お兄さんの言うことを素直に聞けば、すぐに元気になれるよ！」

「うん！ ボク、何でもいうこと聞いちゃうよー！！」

「ならこの開運の壺ををお買いなさい。これさえあればいつでもハッピーになれるよ。今なら特別に5万円にしておくから！」

「えぐつ、えぐつ、うん！ ボク買っちゃうよ！ …… って、どうして親友にえげつない商売してるんだよ！？」

と、こんなやり取りが横で行われているのにも関わらず、視線は本から動かないホッチキス。

なんて力オスな会議なんだ……。

「あの……、そろそろ真面目にやりません……？」

しびれを切らした巡崎さんが、天使のような一声で提案。

「もちろん！ さあ朱夏！ さつさと会議を始めろ！！」

「みつちーの前だけは強気なのね……」

当たり前だ！ 好きな子の前くらい見栄を張らせろ！

「……もう無理なのになえ……」

と優が呟く。

「おぶうつ……！」

ちくしょー！！ わかってるわい！！

「公太なんて放っておいて、さつさと会議を始めるわよ！……！」  
ほっとかれた！？ てか朱夏テンション上げすぎ！？

「うちの班は占いの館の電飾を行います！！　そこでホッチキス！  
！」

「……な、なに……？」

突如指名されたホッチキスの顔には動揺の色が。朱夏の勢いについてける奴なんて、そういないからなあ。

「あなた、電子工作が得意って聞いたわ！　そこで！　電子工作で自動制御できる照明器具を作りなさい！　返事は！？」

「は、はい！」

某元プロテニスプレイヤーより暑苦しいな……。ホッチキス、軽く怯えてるぞ？

「朱夏、そろそろ少し落ち着け」

「ハア、ハア……。そうね。少し落ち着こうかしら……」

息を切らす朱夏の背中をさする俺。なんでこんなにテンションが高いいんだよ……。

ああ、また性格を変えているのか……。

「あの……朱夏さん、私は何をすればいいのでしょうか？」

おずおずと手を上げる巡崎さん。このメンバーの中で唯一大道具に向いていない彼女。

「無論、みっちーにも電飾をしてもらわ！」

「……でも私やったことないですよ。何をしたらいいか検討もつかないし……」

「そこは安心して。工作は全て男子、主にホッチキスがやってくれるから」

「みっちーには電飾のデザインを任せるわ。占いの館のコーディネートをしてくれるかしら？」

それはいいアイデアだ。巡崎さんは美術部のエースだけあってセンスは抜群だしね！

「それなら大丈夫です！ 私、頑張りますね！」

うつつ、可愛い……！

素直に返事をする巡崎さんを見て、またもや俺の瞳には涙が浮かび、心は沈んでいったのだった。

「公太、あなたはホッチキスの手伝い。優はみっちーのサポートをお願いね」

「了解。今公太は沈んでいるから、後で僕から話しておくよ」

「うつ……ひぐ……ひぐ……」

「情けない男ね。みっちー、こんな奴、彼氏にしないで正解よ？」

「は、はは……」

「おい！！　なんてこと言いやがる！！　屋上行こうぜ……　久しぶりに荒ぶってきたぜ……」

「さあ、あまり時間はないのよ？　早速行動を開始しましょう。ホッチキス、工作お願いね。みっちー、優、ついてきて」

「荒ぶる俺を無視ですと！？」

というセリフさえ無視して、二人は部屋から出て行った。

……いいさ、俺なんて。ただの脇役だし……うつ……。

「公太、いつまでばやいてるんだ？ 作戦開始だって。リア充になりに行くぞ」

「……！！ そうだ！ リア充になるためだ！」

その時、公太に電流走る

優は俺の心に火を着けるのが実に上手い！

うおおおおおおおー！！！！！！ 今、俺は叫んでいた！  
……脳内で……！！

リア充！ つい最近知った言葉だけど、とても甘美ですばらしい響きだ！

「俺はなんとしてもリア充になるぜ！！ やる気が出た俺は、もうどうにも止まらない！」

「はあ……まったく世話が焼けるよ。公太は……じゃあ僕は委員長らのところ行ってくるからね、 って、聞こえてないか」

優の嘆息が聞こえない俺は早速ホッチキスに話しかけた。

「ホッチキス！ この中で電子工作が出来るのはお前だけだ！ 俺に電子工作を伝授できるにはお前しかない！ 早速教えてくれ！」  
「う、うん。じゃあまずパーツの説明からするね……」

ホッチキスは部屋の棚にあった半田ごてや電子部品を取り出して机の上に広げた



「これを組み合わせて作るんだよ。まずは回路図を描いて、その回路通りに部品を接続するんだ」

「うまく接続出来ていたら、電気を流したとき、ちゃんと動いてくれるんだよ」

「ふむふむ。で、どうやって接続するんだ？」

「ああ、それはね」

普段はほとんど喋らないホッチキスが、水を得た魚のように俺との会話を弾ませていた。

趣味のことを誰かと話すことがよほど楽しかったのだろう。

「そうなんだ。で、これは？」

「これは発光ダイオード。今回は電飾だからこれを一番使うことになるね。様々な色を使って雰囲気を出さなきゃ」

「さすがホッチキス！！ 詳しいな！」

「そ、そんなことはないよ……。基礎中の基礎だし……」

俺はいつの間にかホッチキスとの会話に夢中になっていた。

次の日の朝6時。

またもや『6時に来ないと一生童貞』などという脅迫メールが送

りつけられた為、こんな時間にも関わらず俺は学校にいた。

「相変わらず刺さるぜ……。このメールはよお……。ふわあああ  
あ」

さつきから欠伸が止まらん。しかし連日6時登校は辛いものがあるぜよ……。

「公太、おはよう」

優が登校。……ってことは。

「昨日も学校に泊まったのか？」

「いや、昨日は帰ったよ。ただ委員長に呼ばれてね」

「お前もか」

「まあね。これから毎日6時登校って言ってたよ」

マジですか！？ それは無理ってもんだ！！

……と朱夏に抗議しても無駄なんだろうな！。

「……二人とも、おはよう」

朝に集まるように指示した朱夏が、元気よく教室に　　って。

「……朱夏、一体どうしたんだ？ その顔。……化粧が崩れているぞ……？」

「……化粧なんてしてないわよ……。ただどうしようもなく眠いだけ……。……あそこでの展開は卑怯だわ……」

ぶつぶつ言ってる朱夏は今にも倒れそうな顔をしていた。目の下のでかいクマが、夜更かししていたことを証明していた！

どうせギャルゲーでもやっていたんでしょね……

「……ぶつぶつ……」

「本当に『ぶつぶつ』言ってるだど!？」

「……いいツツコミね……。脇役にはだいが慣れてきたようね……  
さあ、会議するわよ……」

いや、そんな死にそうな顔で言われても……。

「委員長。あれの準備は出来たからね」

「本当!? さすが優ね! 今日、早速実行するわよ!」

「これでみっちーのホッチキスへの高感度アップ間違いないし!..  
テンション上がるわ!..」

おお、復活。……あれ? 俺、その話聞いてないんだけど……?  
……と思っているのが顔に出たらしい。優が俺の耳元で囁いた。

「……………愛してるよ」

「!？」

「冗談だ」

……良かった、俺にそっちの気はない。

「本当は死ぬほど恨んでいる。毎日呪いを掛けていくくらいさ」

「!？」

「冗談だ」

「……いい加減、早く話せよ」

温厚なボクちゃんでもそろそろ怒りますよ!?

「そう怒るな、公太。愛してるのは本当だ」

「さも本当みたいに言うな！」  
「で、作戦何だけど、これから  
スルー！？」

と突っ込もうとした俺だが、耳から入ってきた作戦の内容に、  
思わず我が耳を疑ってしまった。

そこまでやるのか！？　これ、素直な感想ね。

「　　ってことで。何、最終的には上手くいくよ」  
「実はまだ考えがあるんだけどね……。これはまだ内緒にしておく  
よ。学園祭当日が楽しみだね……」

優の黒い笑み。

こいつが何か企むとき、必ずこの笑みを浮かべるんだ！  
そして決まってその企みは成功する！

「さあ、まずは最初のステップだよ。公太、技術室に行こうか」  
「……………マジでやるのか……………」  
「当然」  
「さっさと行きなさい！！　私はもう一つの方を仕掛けてみるわね  
フフフ……………」

「まだあるのかよ！？」

学校最強（……………というよりは最凶か……………）の頭脳を持つ二人が揃  
っているんだ。穏便には済まないだろうなあ……………。

俺は諦めを込めた嘆息をした後、優に誘われるがままホイホイと  
ついていったのだった！

(……おかしい……)

帰りのHR中に気がついた。

前に座るホッチキスの様子がおかしい。妙にそわそわしている。  
何かあったのか……？

俺はこそつと声を掛けてみた。

(どうしたんだ？ ホッチキス)

「……………」

反応がない。なら少しつついてみるか。

(ツンツン)

「……………」

これでもダメか……。ならば、耳に息を吹きかけるか。

(フウー)

「ひえあああつ！！ さ、里美君！？ な、何か用！？」

お、気が付いた。

「ん？ どうした？ 倉敷」

ウルモフがホッチキスを睨む。

「ええ！？ …… あ、いや …… すみません ……」

今はHR中。クラス中の視線を一身に浴びるホッチキス。おずおずと着席した後、俺に抗議してきた。顔真っ赤だ。

（今の公太君でしょ！？ 止めてよ、心臓に悪いから！）

（悪い悪い。声掛けても反応がなかったもんで。一体どうしたんだ？）

（な、なんでもないよ ……、もう変なことしないでよね ……）

ぷいっとそっぽを向かれた。

……………。

……………これ女の子なら可愛かったんだろうな……………。

……………。

……………いや、そうじゃなくて。

（……………おかしい。何かがおかしい……………）

「ひえあああつー！！ しゅ、朱夏さん！？ な、何か用！？」

なっ！？ 今度は巡崎さんだと！？

「ええ！？ …… あ、あの……………すみません……………」

顔を真っ赤に染めた巡崎さんが恥ずかしそうに着席。その隣で朱夏がニヤついている……………。お前が犯人か。

そのHRが終わって、すぐのこと。

「さ、里美君！ ちょっと相談があるんだけど……！」

「え……、ええ！？ ほ、ホッチキスが、しゃべったあああああ  
……！」

まさかと言うべきか。ホッチキスの方から声を掛けてくるとは！

「……そ、そりゃ僕だつて話くらいするけど……、えっと、そうじやなくて……！ あ、あの、えと、そのっ……！」

「おいおい、少し落ち着け！ ちゃんと話聞くから！」

焦りすぎて言葉になつてないぞ……。

「……落ち着いたか？ で、何があつた？」

「それは………」

焦っていたと思ったら今度は沈んだぞ……。こりゃただごとじゃないぞ！？

ホッチキスの言葉を待つ間、俺の携帯が震えた。こっそりと見てみるか。

『朱夏：ホッチキスを技術室に連れてきなさい』

……やる気なのか……。あれを……。

ちらつと優の顔を伺つと、

「……………」

と、いつもの笑みを俺に向ける。やっぱりやるのか……。

「なあ、ホッチキス。ひとまず技術室へ行かないか？」

「う、うん。そうだね」

俺は優の方を一瞥した後、ホッチキスと共に教室を出た。

「それで、一体何があつたんだ？」

「それは……それは……」

このテンパリ方は普通じゃないな。明らかに何か大きい悩みを抱えていそうだ。

つまり、だ。ここで悩みを聴いて解決してあげれば！

素晴らしい脇役としてホッチキスに印象付け出来るではないか！！

「ホッチキス。何か悩みがあるんだろ？ 話してくれよ。同じ7班の仲間じゃないか！」

肩を叩き、親近感を醸し出す！

「俺ら仲間だろ！？ 俺は仲間であるホッチキスの力になりたいんだよ！！」

さらに友情アピール！ 日頃からワンピースを愛読してるからね



！　　こういうのは得意さ！

「仲間……。うん。公太君、聴いて欲しいんだけど……」  
「任せとけ！　仲間のためなら何だってするぜ！」

ホッチキスはたつぷりと間をおいて、そして呟いた。

「……実は僕、ラブレターを貰っちゃったんだ………」

「フハハハハハ！　　なんだ、ラブレターか！　　そうかそうか！」  
ハッハッハ！　　何の悩みかと思ったら大したことじゃ

「　　ラブレターだとう！？！？」

ホッチキスにラブレターだって！？　　そんなマニアックな奴がいるのか！？　　……　　ホッチキスに失礼でした。

「これなんだけど……」

ホッチキスはラブレターらしき手紙を取り出し、俺に渡してくれた。

一見するとただの手紙なんだけど……………！？

……ちよつと待て！ 普通ラブレターって封止めに可愛いシールとか貼ってあるもんだろ！？

なのにこれは……………！ シールの変わりに針で封止めしてある！？ 怪我すんだろ！！ 不幸の手紙と勘違いしそうだ！

「……………中身も見てよ……………」

「お、おう……………」

慎重に針を取り、中身を確認。

「これは！？！？」

中身を見て愕然とした。なんじゃこれは！？

『啓君の暗くて目立たなくて、でもホツチキスとかハサミとか持っているところに惹かれました！ 私のことホツチキスのようにガツチリと挟み込んでください！ もう串刺しにしちゃってください  
今日の午後7時、技術室でお待ちします！』

「……………」

「ど、どうなのかな、これ……………」

……………。

唐突に脳裏に浮かぶ、あいつの顔……………。

「もう一通来てるんだけど……………」



なんだこれ！？ 手紙一面に“好き”と書かれているとか！！  
怖すぎる！！

「ホッチキス！ これ、なんなんだよ！！」

「僕にもさっぱりわからないよ！ でも何が凄いかって、この手紙  
なんと立体視まで出来るんだよ！！」

「なんだって！？」

その手紙を凝視してみた。徐々にぼやけて、ピントが合つて。  
すると

「うおおおお！！ すげえ！！ ”LOVE” って浮き出てきた  
ぞー！！ 3Dだー！！」

どれだけ手が込んでるんだ！？

「どうしよう、里美君……。里美君ならラブレター貰ったことがあ  
ると思うんだけど……」

いやいや、こんなラブレター貰ったことなんてないぞ！！

「こんなときってどうしたらいいのかな……。？ やっぱり行った方  
がいいのかな……。？」

これどう見てもイタズラだって！！ 絶対行っちゃ駄目だ！！

……。…… って普通ならアドバイスするんだけどね……。これ、絶  
対朱夏の仕業だよな……。

そういえば朝、朱夏も何か仕掛けるとか言ってたよな……。これ  
のことだったのか。

そう考えるとさっきの巡崎さんのことも辻褄が合う。

恐らく巡崎さんにも似たようなことをしたんだな……。

さて、これが作戦の一部であるなら、俺はこの手紙通りになるために行動しなければならない。

つまり俺はホツチキスを、午後7時に技術室へ誘導しなければならないってことか。

「頑張れ！ ホツチキス！ これはチャンスだ！ 絶対ものにしろよ！ 午後7時にここだよな！ なに、大丈夫さ！ 俺が言うんだから間違いない！！」

ああ、俺は今、嘘をついている……。

俺の顔は恐らく引きつった笑顔をしていることだろう。

「そうかなあ……相手の名前すらないし、好きっていっぱい書いてるけど、僕そんなに好かれるような人間じゃないし……ひょっとしてイタズラなんじゃ……」

そこ！？ いや、疑うところはそこじゃないでしょう！？ 他にもつとあるでしょう！？ 針とか針とか針とか！！

絶対イタズラだよ！ いや、これはもはや脅迫の類ですよ！？

……と普通ならツツコミを入れるところ。でも今はこう言うしかない。

「心配するな！ 絶対、100%イタズラじゃないさ！！ それに疑うのはラブレターをくれた相手に失礼だろ？」

うわあ……、我ながら無茶苦茶な言い分……。

「そ、そうだよな！ 疑うなんて相手に失礼だよな！ 僕、7時ま

でここに居てみるよ！」

ああ、ホツチキスの目が輝いている……！ やっぱり嬉しかったんだろうなあ……。やべえ、罪悪感ばねえ……。

「じゃ、じゃあ、7時までには心の準備してろよ！ 俺は少し席をはずすから。なあに、心配するな！ また戻ってくるから！」

「あ、里美君！」

心がピュアなボクちゃんは、ホツチキスを騙すことに耐えられない……！

……朱夏にも訊きたいことがあるし。

俺は逃げるように技術室を去ったのだった。

……脇役って辛いなあ……。

………これ、脇役関係あるっけ……？

## 第七話 ドッキリ密室密着事件（後編）

「朱夏さんや。あれはなんでございませう？」

教室で優と談話していた朱夏に詰め寄る。

「あれ、つてなに？」

「とぼけるな！ あのラブレターだよ！ なんだあの内容は！ 目立たないとこに惚れたとか何の冗談だ！？」

「仕方ないじゃない！ ホッチキスのことって、あれくらい思い浮かばなかったんだから！」

「他に褒めるところとかあるだろう？」

「ガチで思い浮かばなかったの！！ じゃあ公太だったらどんなこと書くの！？」

「そりや……、えーと……」

俺はしばらく考えてみたが

「 ないな」

「でしょ？」

「可哀想なホッチキスだ……そうだ、中身だけじゃない！ なんだあの針！ 下手すれば怪我するぞ！？」

「それに一面”好き”って書かれた手紙！ 怖すぎてちびりそうだったぞ！」

「あれよ。今流行のヤンデレよ。なかなか来るものがあつたでしょ？ 立体視を表現するの、結構時間掛かったんだから」

「余計なところに力を入れるなよ……」

なんかどつと疲れた気がする……。こいつをまともに相手にする精神が持たんぞ……。

「そついえば巡崎さんはどうした？ お前巡崎さんにも何か仕掛けたる？」

「もちろん。彼女にも同じようなことをしたわ。7時に技術室に行くように仕向けたから安心して」

「後は優の作戦次第よ？ 準備はどう？」

「ばっちりだ。カメラの準備も整ったし、いつでも中を覗けるよ」  
優のノートパソコンには、技術室の映像が映し出されていた。

「お前は一体何者なんだよ……」

「いやね、幼いとき映画で見たスパイ映画に影響されてね。それ以来カメラを仕掛けることが趣味になってるんだ」

「お前、いつか捕まるぞ……」

本当にこいつときたら……まさか……！

背筋が凍った気がした。もしかしてこいつ……！！

「お前まさか……俺の部屋にカメラなんて置いてないだろうな……」  
「ん？ もちろん仕掛けてるけど？」

しれつと言うな！ ってことは、俺のプライベートを全て、こいつに見られているということか！？

「早く外せよ！！ なんで俺の部屋にまで……！」

「なんでって言われても。僕と公太の間に隠し事はなしだろう？」

「お前の頭の中で、俺達は一体どんな関係になってんだ……！」

「そうムキになるなよ。誰にも見せないから」

「そついう問題じゃねーだろ……！」

「そんなことよりも、これ見てよ。ハハハハハ、ホツチキス、今か



「何言うか練習しているよ！　これは面白い！」

「ハハハハ、本当だ！　ホッチキスの奴、練習なのに声震えてるじやねーか！　……って、話を逸らすな！」

「公太さ、ただの冗談を本気にするなよ。恥ずかしいぞ？」

「公太、さつきからうるさい」

「やかましいー！」

「はあ、はあ……。何故俺が悪いみたいになってるんだ……？」

「そろそろ7時よ。二人とも、準備はいい？」

「あの作戦、本当にやるのか？」

「当然でしょ。上手く行けば二人の距離はよりいっそう縮まるし、最低でも互いを意識するようになるわ」

「そうなんだけどさ」

「この作戦、正直気が引けるんだよね……。やりすぎて感じがするし……。」

「いや、そうじゃない。この程度、過去に優らとしてきたことに比べたら対した事はない。だったらこのモヤモヤ感は……。」

「認めたくないだけだ。そう、俺はつまり」

「嫉妬、してるんでしょ？　公太」

「何故それを……！」

「朱夏は見透かされていた……。そう、朱夏の言う通り」

「俺は嫉妬していたのだ。ホッチキスに。本来ならあそこにいるべきは俺だったのだ。」

巡崎さんのことは諦めたつもりだった。事実、最近は色々あったか巡崎さんへの想いは忘れていた。

でも、いざ作戦を開始すると心はどこかでストッパーが働いていたのだ。

「公太、あなた言ったよね？ 最高の脇役になるんだって。忘れたの？」

忘れたわけじゃない。むしろ忘れられるわけない！！

朱夏の叱咤激励。あれは効いたんだ。俺はあの時決心したんだ。だから今だって必死に耐えているんだ！

「忘れてねーよ！ 心配するな！ やるぞ！ 朱夏、優！」

俺の顔は少し引きつっていたかも知れない。でもこれが俺に出来る最大の意地だ！

そんな俺を見る二人の顔が、少し優しく見えたのは気のせいではないと思う。

午後7時。

日は落ち、構内は静寂を取り戻す頃。

ついに技術室に巡崎さんが入ったのをカメラが確認した。

「さて、僕は行ってくるよ」  
「ああ」

今回の作戦名”オナツプ作戦 エピソード1 ドッキリ密室密着事件（後編）”（前編はいつあったんだよ……）がついに開始される。

……もちろん名付けたのは朱夏だ。

作戦の内容、それは二人を技術室に閉じ込めるというものだ。  
ちなみにこの作戦の発案者は優。

「密室は、互いを意識させるのに最高の環境なんだよ！」

「確かに！ 私も体育倉庫に閉じ込められたい！」

「でしょ？ 公太も見てみなよ、ほら、このシーンなんだけど」

「いくら深夜枠アニメだからってやりすぎでしょう。ここだけ作画に力はいってるし。濡れてもないのに足が艶やかだ！」

「体操マット……。新しいかも……！！ 抱き枕から体操マットに変わる日が近いかも！？」

「いいね、それ。うゝむ。ありきたり、王道とはいえ、やっぱり体育倉庫は外せないね」

「……体操服……。確か17着あるけど、新しいの買っちゃおうかな……」

と、アニメで興奮しながら説明する優と朱夏の姿を思い出した。

……優ってそんなキャラだったか……？

つまり体育倉庫のような状況を、技術室で作り出すのが今回の作戦だ。

朝、俺達が仕掛けたのは密室を作り出す罠。カメラは今知ったけど。

これがまた大変な作業だった。

何せ技術室は普通の教室と大した違いはないからだ。出口一つ抑えればよい体育倉庫とは訳が違う。

教室の前後の出入り口。それから窓。これらを全て同時に抑えなければならぬからだ。

教室の窓。実は朝から窓のレールに接着剤をたんまりと塗りこんでおいた。

「なあ、これが終わったらどうするんだよ？」

「大丈夫。これ、水で溶けるから」

塗ってからだいぶ時間が経っている。ちょっとやさつとな力じゃ動かないはずだ。

後は教室の出入り口だが、二人が入った後、つつかえ棒を立てる。これで密室の完成だ！

抜け穴があるとすれば窓ガラスだが、そこにも抜きは無い。

素手で割れるようなガラスじゃないし、部屋の工具は全て隠した。部屋の机は固定式だし、椅子は紐で机に縛った。

技術室で授業の行われない今日という日を選び、このような大胆な手に及んだのだ！！

「ただいま」

つつかえ棒を立てに行った優が帰ってきた。

「フッフ、これからだ……」

モニターには現在の二人の様子が鮮明に映し出されていた

## 技術室

「あ、あの……巡崎さん……？　ど、どうしたの？　……忘れ物……？」  
「……え！？　え、えっと、あのそうじゃなくて……！　倉敷君こそどうしたの……？」

気まずい雰囲気、二人を包み込んでいた。

「僕はその……何というか……。人を待っていたんだ……」  
「わ、私も……。ここで人と会う約束があつて……」  
「そ、そうなんだ……」  
「うん……」

二人は顔を俯かせ、無言のまま立ちすくんでいる。

## 教室

「……緊張が伝わってくるな……」  
「……」  
「ちくしょう、こつちまで汗ばんでくるぜ……！！」  
「……」  
「ホッチキス、頑張れよ……！」  
「あああああっ！！！！　もう！！　じれったいわね！！！！」

モニターを覗きながら、朱夏が苛立っていた。というか爆発した。

「いや、しょうがないだろ！ ホッチキスなんだから！」

「ホッチキスだからねえ。このままじゃ埒があかないね。そろそろあれを使いますかね」

優はそう言うとポケットからキラリと光るものを取り出した。

「なにそれ？」

「これはね……。学校のブレーカーを落として暗闇を作り出す秘密兵器さ。これを使うとしばしの間、停電状態になる。密室で暗闇。完璧な状況だろ？」

自慢げに語る優。その手に持つものは……まさか！

「おいおい！ そりやさすがに危ないって……！」

優が持つもの。それは

ピンセットだった！

「これをコンセントに刺せば、ショートして一気にブレーカーが落ちるよ……！ いくつか同時に刺せば復旧には時間が掛かるだろうね……。あ、ノーパソにはバッテリーがあるから心配しないでいいよ」

「そっちの心配はしてねーよ……！ おい、朱夏も止めるよ！」

「大丈夫よ。ゴム手袋持ってきてるから」

「ゴムが電気を通さないことくらい、公太だって知ってるだろ？」

「もちろん！ なるほど。なら安心だ！ ……って、そんなわけないだろ……！」

おかしい！ こいつらの考え方は根本的に何かおかしい！

「委員長。配置について！」

「了解！」

「止めろって！ コンセントが壊れる！！」

俺の警告など聞こえていないかの如く、二人はピンセットを持ち

朱夏＆優 ♪ ていやー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

躊躇いなくピンセットをコンセントに刺し込んだのだった！！

## 脇役サブストーリー2 ヒロインへのラブレター

公太君の告白をばつさりと切り捨てた私。

最近、なんであの時断ったのだろうと疑問に思うことがある。

「公太君のこと、確かに好き、だった。……うん。好き……」 だった”……」

口に出してみると案外すんなりと解決した。

そう、好き”だった”。

あの告白を受ける瞬間までは。

冷やかし混じりの送り出し。屋上までの階段。ドアを開けて公太君を見つけて。

これから彼が何をするつもりなのか、もちろん分かっていた。それに対してどう返事をするのかも、決めていた。

なのに。

告白を聞いた瞬間。

あなたじゃないの

自然に出た言葉。

彼への気持ち。全てが過去のものになった。



「なんで、なんだろうな……」

私自身、よく分からなかった。

彼のことは好きだった。本当に。

でも断った。私から。

よく分からない。

でも、これだけは悟った。

彼じゃないって

公太君には本当に申し訳ないと思う。

期待させるような素振り、表情、行動、全てをとってきた。

彼の期待には嬉しかった。私だって彼のことが好きだったんだから。

でも、私が全てを壊した。裏切った。

「でも……私は悪くない、よね………？」

後悔はない。私は気持ちに正直になっただけ。だから私は悪くない。

でも、申し訳ない。謝罪したいとさえ感じる。

悪くないけど、謝りたい

私は、こんな矛盾する気持ちを抱えたまま、この数日を過ごしてきた。

今日だって”この数日”のうちの一日なんだ、って考えながら校舎に入って

下駄箱のふたを開けた。

はらり。

下駄箱から見覚えの無い便箋があった。

「なんだろう……？ ……これって……ラブレター……！？」

飾り気のない便箋。

『美都さんへ』とだけ書かれている。差出人の名は……ない。  
内容は、とても誠実で、それでいて気持ちが籠っているのが分かる文体。

いつも通りの日常を送るはずの予定に、突如出現した障害。

「なんで私なんか……」

私は先週、告白を断ったばかり。

それも、誰もが認めるほど仲が良いと噂になっていた相手を、大した理由もなしに、いとも簡単に振った女。

それが私。いい噂になっているとは考えにくい。

そんな私にラブレター……？

「おはよ！ みっちー！」

「ひゃああうううっ！ー！」

……びっくりした！ 突然背後から抱きつかれたのだから！

「お、おはよう、朱夏さん……！」

「どしたの？ 今日はなんかそわそわしてない？」

「そ、そんなことないよ……？ 急に抱きつかれたからびっくりしただけ」

とっさにラブレターを隠し、体裁を繕った。

「朱夏さんはいつも早いね！ 神社ってやっぱり朝早く起きるの？」

するつと世間話を割り込ませ、いつもと同じ私を演じる。

「神社はあまり関係ないんだ。ただ今はやることがあってね」

「へえ、大変だねえ」

「そんなことないよ？ とても楽しいし……！」

「楽しいんだ。いいなあ」

……いつもの私、だよな。

「ねえねえ、みっちー」

「なに？」

「顔、ちよつと赤いよ？ 愉快的なことでもあった？」

「えっ……？」

私の顔が赤い……？

「しかもなんだか嬉しそう。もしかして……ラブレターとか貰っちゃったとか？」

「え、そ、そんなこと……！……！」

朱夏さんは時々とても鋭いときがある。でもよりにもよって今じゃなくても……！

あ、慌てず、慎重に言葉を返さないと

「違うよ、あのね」

「良かったね、みっちー！　じゃあ、私先に行ってるからね！」

良かったね

そう言われたとき、気がついた。

嬉しい。私は嬉しいと思っている、と。

好きだった人にとっても酷いことをした。そんな私を好きになってくれた人がいたことが、とても嬉しく感じられた。

誰が出したのかも分からない、ラブレター。普段なら怖いとさえ思う。

でも今は　少し暖かい

『今日の7時。技術室でお待ちしています』

「うん……。私もすぐ行くから……。絶対行くから……！」

前半は台詞は朱夏さんに。

後半は　誰かも分からない、その誰かに



## 第八話 閉じ込められた主人公／実況を楽しむ脇役（前書き）

優 「さあ、ついに始まりましたよ？」

朱夏 「始まりましたねー。その名も……！！」

朱夏＆優 『 朱夏＆エリートのよく分かる実況コーナー ”！！” 』

公太 「何やってんだ、お前ら……」

優 「さあ委員長。公太にこのコーナーの趣旨を教えてあげて！」

朱夏 「仕方ないなあ！ でも特別に教えてあげましょう！」

公太 「いや、別にいいけど」

朱夏 「仕方ない！ 特別に教えてあげましょう！！」（チラッ）

公太 「いや、だから別に……」

朱夏 「教えてあげましょう！！」（ギロツ）

公太 「……お願いします……」

朱夏 「このコーナーでは主人公視点と脇役視点が同時に進行する場合！」

優 「読者がより分かりやすく進められるように！」

朱夏 「脇役サイド側を実況解説風にして進行するというものです！」

公太 「……お前ら、誰に向かって説明してんだ？」

朱夏 「今回の場合、主人公であるホツチキス視点と！」

優 「 ”元” 主人公、 ”現” 脇役である公太視点が同時に進行します！」

朱夏 「したがって描写によっては、どちらの視点か分からない場面が出てくるので！」

優 「それを脇役サイドを実況形式にして、視点混乱を避けることを目的としたコーナーなのです！」

朱夏「判り易くするために、各セリフにはキャラ名がついておりません」

優「『』の中は実況側、『』の中は主人公となっております!!」

朱夏「現主人公『ホッチキス』視点で話は進み!」

優「現脇役『公太』&その他二人視点で実況、という形になります!」

公太「あまり”現”脇役とか言わないでいただけませんか!」

## 第八話 閉じ込められた主人公／実況を楽しむ脇役

朱夏『それではモニターに写った二人のことは！』

優『私、実況解説の和久井優と！』

朱夏『同じく実況解説の縁朱夏がお送りします！！』

公太『……………』

啓（……………どうしよう……………あの手紙の主って、巡埼さんなのかな……………？）

僕は言葉に詰まっていた。

約束の7時。現れたのはなんと巡埼さん。

先日まで公太君と仲がよかったはず。

噂によると公太君の告白を断ったって聞いたんだけど。

啓（もしかして、告白を断った理由って、僕のことが好きだから……………？）

待って、早まらない方がいい。

彼女は人を待っているって言ってた。もしかしたら別の用件があるのかもしれない。

啓（どうしよう……………でもこのままっても良くないよね……………。よし、聞いてみよう……………。どっちにしる話さないと分からないんだ……………！）

啓&美都『あの……………！！』



プツッ！

美都「キャッ！！」

突然、部屋が真っ暗になった！

朱夏『おおっと！ 二人が口を開いた瞬間を狙うかの如く停電が発生しました！！』

優『素晴らしいタイミングでしたね！ さすがは私たちといったところでしょうか？』

公太『……お前ら楽しみすぎだ……』

優『そろそろ暗視スコープ機能をONにしてみましょう』

公太『そんな機能まであるの！？』

優『押してみよう。ポチっとな』

朱夏『お、見える見える』

美都「な、なんなの？ 停電？」

啓「うん……。びっくりしたあ……」

朱夏『おっと、みっちーは驚いて尻餅をついている！』

優『これはもしかしたら パンツが見えるかも！？』

公太『マジですか！？ おい、エリート！ 見せろ！！』

啓「だ、大丈夫？ ほら、手、捕まってよ」

僕は尻餅をついている巡埼さんに手を差し出した。

美都「あ、ありがとう……」

啓「どういたしまして」

……………あ……………。

僕、生まれて初めて女の子と手を繋いだかも……。

小さくて、とても柔らかかった……。

……って、こんなときに何考えてるんだろ、僕。

繋いだ手を引っ張り、彼女を立ち上げた。

優「おおっと、ホッチキスから手を差し伸べましたよ？ これ

は一体どういうことなのでしょう？ 解説の朱夏さん？」

朱夏「おそらくホッチキスの男としての見栄でしょうね。ましてや相手はラブレターをくれた相手かも知れない。少しでも男気を見せたい」

朱夏「そう思うのは男として当然というでしょうね。いやあ、その心意気、分かりますねえ。私にも覚えがあります」

公太「なんで朱夏が男の気持ちを知っているんだよ……」

美都「いたいっ！」

巡崎さんが立ち上がったとき、彼女は痛みを訴えた。

啓「どうしたの！？ どこか痛んだの！？」

美都「ごめんなさい……。少し足をひねっちゃったみたい……」

朱夏「す、素晴らしい！！ なんてベタな展開！！」

公太「おい、これまずいだろ！？ 助けに行かないと！」

朱夏『ダメ。ここは主人公に任せるところよ。脇役がでしゃばつちやいけない』

公太『……………そうか……………』

啓「大丈夫！？　今すぐ保健室へ行こう！　まだ先生もいるだろうし……………。歩ける！？」

美都「……………大丈夫、歩ける、よ……………。あつ……………！」

啓「無理しちゃダメだよ！！」

ひねった足を前に出す度、巡崎さんの顔は苦痛で歪んだ。

巡崎さんは強がつているけど、歩くのはとても無理だ……………！  
僕はどうしたらいい……………？　そんなの決まっている！

啓「……………僕が巡崎さんを背負うよ……………！　だから無理しないで……………！」

恥ずかしいけど、今はそれどころじゃない！

公太『何だと！？　ホッチキスの奴、いつの間にそんな大胆なことが出来るようになったんだ！？』

朱夏『主人公補正といったところかしらね。ホッチキス、やるじゃない』

優『つまり巡崎のおっぱいがホッチキスの背中に当たるということだね』

公太『なんですと！？』

啓「ほら、ゆっくりと乗って……………！」

美都「うん……。ありがとっ、ごめんね、倉敷君……」

啓「気にしないでよ。困ったときはお互い様だから」

公太「羨ましい 羨ましいぞ!!」

朱夏「そんなにおっぱいがいいの？ 仕方ない。なら私が乗ってあげるわ。全く公太ったら、エッチなんだから……」

公太「やかましい！ そういうことじゃないわい！ それに妙に艶っぽく言っな！」

お前にはあまりおっぱいないだろ!! …… ってことは黙っておこう。

公太「ぐえっ!! …… ホントお前はすぐに殴るのな……」

朱夏「失礼しちゃうわね。まだ発展途上のよ!!」

公太「なぜ思考が読めた!？」

朱夏「おっぱいの話題が出る度に、いつもそう言われてきたからよ!! 文句ある!？」

公太「……ありません」

…… 朱夏って、やっぱり苦労してんだな……。

啓「しつかりとつかまってね……」

美都「……うん」

優「おっと！ 二人は戸惑いながらも無事に合体!!」

公太「その表現は適切ではありませんよ!？」

朱夏「そしてそのまま扉に向かいます が!!」

急いで保健室へ行かないと……！

僕は部屋の扉に手を掛けた。けれど。

啓 「あ、あれ？」

美都 「どうしたの？ 倉敷君……？」

啓 「扉が開かないんだ……」

優 『大 成 功 ！！』

朱夏 『完全に密室！！ ひゃっほーい！！』

公太 『どうしてそんなにテンションが高いんだよ……』

優 『それはもちろん！』

朱夏 『楽しいからよ！！』

公太 『聞いた俺が馬鹿だったよ……』

啓 「巡埼さん、ちょっと待ってて！」

僕は巡埼さんを降ろし、部屋を調べて回った。

啓 「ダメだ！ 前も後ろも開かない！」

そつだ、窓！ 窓からなら出られるかも……！

優 『フフフフ…… もちろん窓も……！』

朱夏 『開かないんです！！』

啓 「窓も開かない!？」

美都 「もしかして私たち 閉じ込められた、のかな……」

啓 「そんな……一体どうして……？」

美都 「……私のせい……」

優 『おお！ なんという絶望ムード!』

朱夏 『……お前らは本当に幸せムード一杯だよね……』

啓 「そうだ、何か窓を割る道具とかないかな……？」

美都 「……」

……どうしたんだろ……。さつきから難しい顔をしている巡埼さん……。

啓 「……えと……、足、大丈夫……？」

美都 「……え、うん……！ ……大丈夫だよ！ 道具、探さないと!」

啓 「う、うん！ 確かここに道具箱があつたはず……」

彼女の態度の変容に少し戸惑いつつ、僕は道具箱を探し始めた。

啓 「見つけた！ 確かこの中にトンカチとか入っていたはず……!」

優 『ところがどっこい!』

朱夏 『入っていないんです！ 空っぽです！ これが現実……！  
さあ、お引取りを……!』

公太『一条……！』

啓「道具がない……となると……椅子を使おう」

美都「椅子は危ないよ！」

啓「僕は大丈夫だよ！ それよりも巡埼さんの足の方が心配だから！」

美都「倉敷君……」

公太『あれ？ 巡埼さん、今ちよつとホッチキスにときめいてなかったか？』

朱夏『……ときめいていたわね……。縁の糸も少し太くなつたみたいだし……』

優『いい傾向だね。でも、そう簡単に脱出はさせないよ？ 無論椅子にも！』

啓「ああつ！？ 椅子、机に縛られてる！？ くそ、なんて硬く結んであるんだ……！」

優『いやあ、ここまで完璧に罠に掛かってくれるなんて、仕掛けた側としては清々しいですね！』

朱夏『そうですねー！ まるでホッチキスがアホな子みたいですしー！』

公太『……すまん、二人とも……。もうじき助けにいくから……』

啓「ちくしょう、椅子まで動かないなんて！ これじゃあ巡埼

さんが……」

美都「もついいよ。倉敷君」

啓「え？」

美都「もついいよ。私は大丈夫。痛みも引いてきたし、少し休めば歩けるようになるから！」

美都「それにね。少し待ってればきっと助けがくるよ！ だから、ね！」

啓「うん。……そうだね……」

少し待っていれば。

そうだ。里美君は言ってた。必ず戻ってくるって。

それを思い出すとどっと安心した。

それと同時に歯がゆかった。こんな大変なときに、何も出来なかった自分自身に。

啓「僕、情けないよ……」

美都「……どうして……？」

啓「だってさ、クラスには全く馴染めてないし、友達だっていないし……。いつも勇気を出せなくて声を掛けたくても、何も出来ないんだ」

啓「そしてこんな時だって、何も出来ない……。僕、本当に良いところがないよ……」

ははっ、とつい空笑い。ああ、なんて情けないんだ。そのとき

美都「そんなことないよ！」

そんな僕を見て、巡埼さんが叫んだ。

美都「そんなことない！ 私、倉敷君の良いところ、たくさん知っ



たよー!!」

啓「そんなところ、ないよ……」

美都「いいから黙って！ 倉敷君は良いところをたくさん持つてる！ 現に今、私を心配してくれてるでしょー!？」

美都「足ひねったからって、私をおぶってくれたじゃない！！ 私の足を気遣ってー!!」

美都「倉敷君は情けないんじゃない！ 優しいんだよ!？」

啓「やさ……しい……?」

僕、そんなこと初めて言われたよ……。僕が優しい……?

美都「そう。倉敷君は優しい。それが倉敷君の良いところ！ だから良いところが何も無いなんて言わない!！」

啓「巡埼さん……… うん……… ありがとう………」

美都（それに今回の手紙だって……、ずいぶん救われたんだから……）

美都「それにクラスに友達がいらないなんて嘘だよ！ だって、いるじゃない！ 私とか委員長さんとか!！」

美都「他にも和久井君とか、さ…… 里美君だって……！ 7班みんな、倉敷君の友達だよ!？」

朱夏『うつっ！ イイハナシダナー!!』

公太『青春だ………!!』

朱夏『そうだ、そうだよ。友達だよ……。あれ……? 目から鼻汁が……』

公太『なんて感動話なんだ！ 俺、これが映画なら3回は見に行くよー!!』

優『そうか、僕ってホッチキスの友達だったのか……。初めて知ったよ』

公太『エリート君のバカタレ！！ 7班はみんな親友なんだよ！！  
昔から決まっていたんだよ！！』

朱夏『そうよ、このバカ！！ 空気読みなさいよ！！』

優『そんな号泣しながら迫るなよ……。わかったって、友達だ  
ろ？』

公太『いや、わかってないね！ 親友なんだよ！』

朱夏『そうよ！ 親友よ！』

優『わかった、わかったから！ そんなに引つ付くな！ 特に

委員長！ 鼻水汚い！！ …… 公太のならいけど……』

朱夏『…… あんたらって本当に気持ち悪いわね……』

公太『…… ボクにそっちの気はありませんよ？』

啓『友達……、僕に友達……。 …… 本当に、本当に嬉しいよ…

……！ …… 嬉しすぎて……』

美都『倉敷君……』

優『あら、ホツチキス、泣いちゃった。 …………… あれ？ 公  
太と委員長がいない……？』

優『あ、モニターに公太が』

公太『大丈夫かーっ！？ ホツチキスーっ！！』

朱夏『みっちーっ！！ 無事ーっ！！？』

啓『里美君！？』

美都『委員長さん！？』

俺と朱夏は我慢が出来なくなり、急いで二人の元へ駆けつけ、そ

して

公太「俺達友達だもんな！ 心配したぜ！ うわーん！！」

朱夏「うっ……！ そうよお！ 友達よお！」

啓「ちょ、ちょっと！ 二人とも！？ 急にどうしたの！？  
く、苦しいよ……！！」

と俺達は友情を確かめ合ったのだった。

優『むさくるしいけどね』

第八話 閉じ込められた主人公／実況を楽しむ脇役（後書き）

少しゲーム形式のようになってしまいました。

読み辛かったらすみませんでした。

主人公、脇役の両者視点を同時に進める描写は勉強中ですので

どんどん悪いところは指摘してくださいね！

よろしく願います！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7768y/>

---

俺こそが名脇役！

2011年12月1日16時57分発行